

神降ろしをしたら、施しの英雄が降りてきた。

黒い小説家

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

インドの叙事詩『マハーバータ』に登場する。太陽神スーリアの子であり不死身の大英雄カルナ。

彼は死後、太陽神である父のスーリヤと一体化し、神格化されたと言われている。

そんな彼が何の因果なのか、博麗の巫女の誤った神降ろしによって神々と妖怪が住まう楽園―幻想郷に呼び出されてしまった。

神として降ろされたカルナが幻想郷に住まう少女達と、時には闘い、時には施しを与え、比較的にほのぼのとした日々を過ごす物語

目次

神として呼ばれた施しの英雄	1
降ろされた場所は幻想郷	5
伝統の幻想ブン屋	10
氷の妖精と大妖精	14
二柱の神と現人神	21
紅き館への招待状	29
霧の湖でのリベンジ	33
紅魔館へ	38
レミリア・スカーレット	42
異国の僧侶（バラモン）と妖怪の賢者	49
学問を学びに	55
人里へと	58
大英雄への質問	63

神として呼ばれた施しの英雄

青年は目覚めると、自分がいる空間が今までいた場所とは違うことに気づき周囲をキョロキョロと見回す。

青年がいた場所は神棚が置かれている非常に簡素な作りをした和室、自分が立つ床には魔法陣のようなものが描かれていた。

黄金の輝きを帯びた白髪、まるで幽鬼のような白い肌。長い前髪から覗く、他人を寄せ付けない鋭い目付きと透き通った蒼氷色の瞳。

股体を覆う黄金の鎧と胸元に埋め込まれた赤石が眼を引く、片手に金色の槍を持つ細身の青年。

突然知らない場所にいれば、普通の人間は困惑し、焦るだろう。だがこの青年は焦るような様子はなく、至って冷静だった。そして「問おう、お前がオレを呼んだのか?」

青年の前にいたのは巫女装束を身に纏った一人の少女だった。

黒髪の真つ直ぐなストレートヘアで後頭部にはトレードマークとも言える大きな赤いリボンを結んでいる

衣服は変わった紅白の巫女装束、袖が着いておらず肩や腋を露出しているが代わりに白色の別途袖を腕に着けており、下に履いているのは袴ではなく何故か赤色のスカート。

しかし少女は青年の問いには答えなかった。

それも無理はない。少女はまるで予想外の出来事が起きてしまったと言わんばかりに、啞然とした表情を浮かべており、声が出せないような状態になっていたのだから。

「おい、どうした?」

巫女少女が返事をしてくれないので、もう一度話しかける青年。しかし

突然、少女は落ち込んだような表情を浮かべながら、その場に屈み込むと、ようやく口を開いて喋り出した。

「神霊の力を借りるはずが、どうして本物の神霊が降りて来ちゃったのよ」

どうやらこの巫女少女は神霊を降ろして、その力を借りる儀式をし

ていたらしい。

しかし、今回は神霊の力を借りた訳ではなく、どういう訳か神霊そのものを降ろしてしまつたらしい。

「すまない、話を聞いてくれ」

「……なによ？」

「お前がオレを呼んだのか？」

「そうよ、私が貴方を呼び出したのよ、何か文句でもある？」

自分が呼んだ神霊に対して逆ギレをする巫女少女、いったい神を何だと思っているのか？

しかし、そんな態度を霊夢にされても青年は恨みも怒りもしない。寧ろ、それもありだと受け入れているように見える。

「我が名はカルナ、太陽神スーリヤの子、お前の召喚により現界した。」

青年の名はカルナ、太陽神スーリヤと人間の間に生まれた半人半神。そして現在は父であるスーリヤと一体化している。

「随分と丁寧なご挨拶ね、私の名前は博麗霊夢、この博麗神社で巫女をやっているわ」

「それでは霊夢、何故オレを現世に呼び出した？」

「別に呼び出したくて呼んだんじゃないわよ。神降ろしの儀式をしてたら突然貴方が降りてきたのよ」

霊夢は他人事のように言っているが、神として呼ばれたカルナからしてみれば、とても迷惑な話である。

だが、こうして呼ばれたのも何かの因果だと思い受け入れよう、それよりも霊夢にやって貰わなければいけないことが一つある。それは

「早速で悪いが霊夢、此処にいることが不満なら、オレを神々が住まう場所に戻すことはできるか？」

「そんなこと出来る訳ないじゃない。神霊自体が降りてくるなんて初めてのことだから」

このとき霊夢は借りた神霊の力を返すことはできるが、降りてきた神霊本体をどうやって元いた場所に戻せば良いのかなんて分からなかった。

カルナも帰る方法がわからないなら仕方ないとすぐに諦め、取り合えず別の件を考えることにした。

「そうか、ではオレはどうすれば良い？」

「知らないわよ、あんたの好きにすれば良いじゃない」

「承知した、では自分で寢床を探すとしよう」

本来なら霊夢が悪い筈なのにも関わらず、カルナは一切の咎めもせず、寧ろ潔く立ち去ろうとする。

そんなカルナの底抜けに寛容な性格を前に、霊夢は自分の今までの態度が申し訳ないと思うと同時に、このままカルナをほっとく訳にはいかないと思ったのだろう。

この場から立ち去ろうとするカルナを呼び止めようと決意をした。

「待ちなさいカルナ！」

「……どうした霊夢、オレに何か用でもあるのか？」

「貴方が元いた場所に帰れるまで私の家に泊まらせてあげるわ、元はと言えば私の責任でもあるし」

「迷惑を掛けるとは思うが世話になる」

人間である霊夢に深く頭を下げるカルナ。それに対して霊夢はカルナのあまりにも義理堅い態度を前に動揺を隠しきれなかった。

「ちよつと頭なんか下げなくて良いのよ、あんた神様でしょ。」

まあ、その神様にこんな態度をしてる私も無礼極まりないけど」

「問題ない、普段通りでいてくれ」

「ありがとう、そう言ってくれると助かるわ」

このとき霊夢は、カルナは神というよりも、清々しいほどの誇り高い精神性を持った聖人というイメージが強かった。

それも無理はない。何かを乞われたり頼まれた時に決して断らない事を信条とし、その悟りの境地と言える無我の精神性から『施しの英雄』と呼ばれるほどの英雄なのだから。

「それじゃあ着いて来て、私の家を案内するわ」

「すまない、恩に着る」

こうして、霊夢に神として降ろされたカルナの幻想郷生活が始まった。

果たして、これからカルナを待ち受けているのは、終わりの見え無い戦闘か、それとも穏やかな安寧なのか。

降りされた場所は幻想郷

「尋ねるが霊夢よ、この世界はどういった場所なのだ？」

神霊として現世に降りてきたのはこれが初めてだったが、少なくともこの世界はオレが生まれ育ったインドではなさそうだ。

景色や建築物を始め、オレが住んでいた世界とは雰囲気や気配がまるで違う世界だからだ。

居間と呼ばれる、非常に簡素な作りをした和室に来て早々カルナに質問されると、霊夢は何かを思い出したような表情を浮かべながら返答をする。

「そういえば説明しなかったわね。ここは幻想郷、あいつ風に説明するなら、神々や妖怪達が住まう楽園と言ったところかしら」

「なるほどな、つまりこの世界にはオレの他にも別の神々や妖怪とやらが住まわっているのか」

景色や雰囲気はかなり違うが、どうやらこの幻想郷という世界はオレが生まれ育った世界に少々似ている部分がある。

外を眺めてみれば綺麗に掃除された神社の境内、そして沢山の草木が育っている広大で緑豊かな大地、こんな美しい自然の景色を見れるとは嬉しい限りだ。

「それじゃあ私も質問するけど、カルナは何の神様なの？ 太陽神スーリヤの子とか言ってたけど、そんな神様は聞いたことがないわ」

太陽神と聞けば、まず日本だとメジャーな天照大神を思い浮かべるだろう。しかし太陽神スーリヤは日本では日天と呼ばれているが、本来はインドの神様の名前なので、日本の宗教などにしか精通していない霊夢にとっては知らないのも当然だといえる。

「元々オレは神と人の間に生まれた子だったが、死後に太陽神であり父であるスーリヤと一体化し、今は神の座に着いているようだ。

つまり、オレも父と同じく太陽神だと思われる」

「神の座に着いているようだって……ずいぶんと軽い発言するのね」

「オレを受け入れてくれた父スーリヤにはこの上無く感謝している、だが申し訳ないが、オレは神の座には興味ない。」

元々オレは半人半神の身、本来ならば神の座に着くような存在ではないからな」

あくまでもオレは父スーリヤの慈悲により神格化したようなもの、本来ならば自分が神として呼ばれること自体がありえないことだ。

だからオレは自らを神とは名乗らない。例え神として呼ばれたとしても、あくまでオレは太陽神の子であり、一人の戦士だ。その信念は生前と何も変わることはない。

「気になってたんだけど、カルナって謙虚過ぎじゃない？ さつきから自分を低く見過ぎてるわよね」

「周りから同じような事をよく言われる。」

「まあ、そういう性格なら仕方ないわね。別に悪い訳じゃないし、寧ろそれがカルナの良いところだと思うから」

「褒めて頂き恐縮の限りだ」

このとき霊夢は、もしかして自分が呼んだのは神様などではなく、聖人のような精神性を持った英霊でも呼んだのではないかと疑い始めてきた。

「ところでさつきから槍を片手に持つてずっと立っているけど、座らないの？」

「問題ない。この態勢が一番楽だからな」

そんな話を続けていると、縁側の方からドタドタとこちらに向かってくる大きな足音が聞こえてくる。そして

「おい霊夢、遊びに来てやったぜ!!」

一人の少女が元気な声で叫びながら居間に上がり込んできた。

髪型は片側だけおさげにして前に垂らしたウェービーな金髪、つばが広くコーンの様に先が尖っている白いリボンが付いた黒い三角帽を着用している、服装は黒系の服に白いエプロンと、いかにも魔法使い然とした身なりをしている

だが、カルナを見た途端、金髪の少女はその場に立ち止まり、啞然とした表情を浮かべながら黙り込んでしまった。

それも無理はない。普段通り友人の家にお邪魔してみれば、色んな意味で神々しい人物が先客として居たのだから。

「ええくと、霊夢？ この神々しいお方は一体？」

「我が名はカルナ、博麗霊夢に呼ばれて、この地に参上した太陽神の子。」

霊夢に話し掛けた筈なのだが、それよりも先に本人が名乗り出てきてしまった。

黄金の鎧と存在が神々しいうえ、幽鬼のような白い肌と無表情さが威圧感になっているのか、さつきまで威勢の良かった魔理沙も、カルナの前では思わず畏まった態度になってしまう。

「わっ、私の名前は霧雨魔理沙だ。よっ、よろしく。」

「魔理沙か、一瞥したところ魔術を所業とする者か。人間の身でありながら、苦行を積むとは感服の一言だ。」

「……えっ？ 何でわたしが魔法使いだとわかったんだ？」

一言も自分は普通の魔法使いだと名乗っていないのに、なぜ初対面のカルナは知っていたのか、魔理沙は戸惑いを隠せなかった。

「驚かせてすまない。オレには相手の本質を見通す能力ちからがあつてな、それでお前が魔術を所業とする者だとわかったんだ。」

カルナは相手の本質を見通す能力を持つが、実直過ぎる故に、齒に布着せぬ物言いや言葉足らずで、相手の全てを誉めているつもりでも、相手には皮肉に受けとられてしまう事が多い。

「……はえ〜 そう言うわけか、それにしても便利な能力だな、羨ましいぜ。」

別に大した能力ではないとは思うが。まあ、羨ましがる本人がそう言うのならそれで良いだろう。

それよりも新たな人物と巡り会えたのだ。一応例のことを聞いてみるとしよう。もしかしたら手掛かりが見つかるかもしれない。

「ところで魔理沙よ、お前は神々が住まう世界に帰還する方法を知っているか？」

「……へっ？ 神々の住まう世界？ 帰還する方法？ 一体どうゆうことなんだぜ？」

カルナのあまりにぶっ飛んだ発言が理解できなかつたのだろう。このとき魔理沙は戸惑った表情を浮かべると同時に、頭を悩ませてい

た。

「そういえばあんたに言ってなかったわね、カルナは私が間違っって呼び出した神様なのよ。まあ、本人は自分のこと神とは認めてないらしいけど」

「えっ、神様!?! どうしてまた?」

「神降ろしの練習をしてたら本当に神様が降りてきたのよ、理由なんて私が知りたいぐらいだよ」

このとき霊夢は自分がとんでもない行いと発言をしていたことに自覚していなかった。

二人が話し合っている中、申し訳ないと思いつながらもカルナは魔理沙にもう一度問いかけてくる。

「話を戻すが魔理沙よ、些細なことでも構わない、何か知ってることはあるのか?」

「わたしは神様関連は専門外だから知らないけど、カルナは神様なんだろう? それなら同じ神様に聞いてみるとかはどうなんだ?」

「では改めて聞こう。神は何処に住まわっているのだ?」

「そうだな、ちよつと遠いけどやつぱり守矢神社かな」

「情報を提供して頂き感謝する、では早速その守矢神社とやらにオレは向かうとしよう」

そう言つてカルナは居間から縁側に歩いて行くと、そのまま庭へと舞い降りた。

そして、カルナが空を飛ぼうとした直後、慌てた表情を浮かべる魔理沙に呼び止められてしまった。

「ちよつと待てよ、まだ場所とか教えていないぜ。どうやって向かうつもりなんだよ」

「神気を感じる方向を辿って向かおうとしたのだが、それでは駄目なのか?」

「そんな事しなくてもわたしは案内してやるよ」

「ちなみに言つとくけど私は行かないわよ、あそこの巫女に絡まれると面倒だから」

自分も誘われることを先読みをしていたと言わんばかりに、霊夢は

守矢神社に行くことを真つ先に拒否する。

本人が行きたくないのであれば仕方ない。それに元々はオレ一人で守矢神社とやらに行く予定だったし、何の問題もない。

「だそうだ、本人に代わって申し訳ないぜ」

「いや、寧ろ十分過ぎるくらいだ。恐縮だが知恵と力を貸して頂こう」

「それじゃあ早速行こうぜ、わたしの後に着いてきな」

こうしてカルナは守矢神社の案内を魔理沙にしてもらおう事になった。

このとき、道中で何か良からぬ事が起きそうな予感をカルナは無意識に感じていたが、それに関して本人はあまり気にしていなかった。

伝統の幻想ブン屋

カルナと魔理沙の二人は、目的地である守矢神社に向かうために森林の真上を飛んでおり、博霊神社を離れてから少しの時間が経っていた。

箒に股がって空を飛んでいる魔理沙に対して、カルナは脚から炎を噴射させて空を飛んでいる。

そんな空中での移動だけでは暇を感じていたのだろう。二人は世間話や雑談を話し合って退屈を紛らわせていた。

「今の人は天空を舞い飛べるのか、やはり人の計り知れない成長ぶりには感服の他ないな。」

「いやいや、確かにわたしや霊夢とかは空飛べるけど、全員が全員飛べる訳じゃないぜ?」

そんな話をしながら二人が空を飛んでいると、前方から人の形をした飛行物体がこちらに向かって飛んで来るのが見えた。

「前方のあれは何だ?」

最初は何なのか理解できなかったが、ある程度の距離まで接近してきたことにより、カルナ達はその飛行物体の正体がわかった。

こちらに向かって飛行する人型の正体、それは背中に黒い翼を生やした一人の少女だった。

カルナ達の目の前までやって来ると、黒い翼を持つ少女は空中に留まり、それに対してカルナ達も移動するのを止めた。

少女は服装はシンプルに黒いフリルの付いたミニスカートと白いフォーマルな半袖シャツ、赤い靴は底が天狗のゲタのように高くなっている。黒のボブの髪型、その頭の上には赤い山伏風の帽子を被っている。

背中には猛禽類の黒く大きな翼が生えており、首はカメラを掛けている。

「どうも初めまして、私は清く正しく生きる伝統の幻想ブン屋 射命丸文です。以後お見知りおきを」

この世界で初めて見る妖怪を前に顔色一つ変えなかったものの、カ

ルナは射命丸を観察するようにじっくりと見つめた。

「この背に黒い翼を持つ者は一体？ 少なくとも人では無さそうだな」

「もしかしてカルナ、鴉天狗を知らないのか？」

顔が象で身体が人間の神がいたうえ、この天狗とやらに似ている容姿の神も心当たりがある。しかしインドにこんな妖怪は存在しなかった。

「ああ、初めて見聞した。それで魔理沙よ、天狗とはどういった存在なのだ？」

「簡単に言えば風や神通力を操る妖怪かな、あとはご覧の通り背中に黒い鴉のような翼が生えてて、中には頭が鳥で身体が人間のような奴もいるぜ」

「容姿だけ聞けばガルルーダのようなものだな」

「ガルルーダ？ なんだそれ？」

ガルルーダとはインド神話に登場する仏教の守護神、容姿は鳥頭人身有翼をしており、日本の鴉天狗のモチーフになったといわれている。

それにしても、この射命丸と言う女天狗、下手に出てるように見えるが、頭が切れるうえに、やたらと狡猾な性格だ。それに、かなりの実力を持った強者と見える。

「あのく私抜きで話をするの止めて貰えませんか？」

「すまない、何せこの世界の事を知らない身でな」

「と言うことはやっぱり、最近幻想郷にやって来た方でしたか？」

射命丸とやらが何故そんなに嬉しそうにしているのか知らないが、少なくとも何かオレに用件があることは確かだろう。ならばこう答えらるまでだ

「それでオレに何か用でもあるのか？」

「単刀直入に聞きますが、新聞記事の取材をさせて貰っても宜しいですか？ 私が質問を問い掛けるので、それに答えて頂ければ構いませんので。」

「承知した。お前の期待に答えられるような返答ができないかもしれないが、最善を尽くそう」

しかし、このカルナの潔い良い返答に不満を持っていた少女が一人いた。

その少女とはカルナの隣にいる霧雨魔理沙。まるで近い将来カルナの身に良からぬ事が起きると言わんばかりに、魔理沙は不安そうな表情を浮かべながらカルナに対して警告をしてくる。

「おい本当に良いのかよカルナ？　こいつの記事のネタにされたら口くちな事が起きないぜ」

「聞きたいのであれば、それに精一杯答えるまでだ。」

それに、オレは何か乞われたり頼まれた時に断らない事を信条としていてな」

生前からカルナは人種身分関係なく、誰かに乞われたり頼まれたりすれば決して断らずに、快く引き受けることを信条としていた。

その事に関する逸話では血肉である黄金の鎧と耳輪でさえ、神に乞われれば捧げたと伝えられている。

その聖人のような信条と底知れない精神性こそ、カルナが『施しの英雄』と呼ばれている由来である。

あまりにも潔い良いカルナの返答に魔理沙は返す言葉も見つからず、ただ納得するしか方法はなかった。

「そつ…そうか、カルナがそう言うなら仕方ないな」
「では早速始めますね。」

そう言うのと射命丸は胸ポケットからメモ帳と筆記具を取り出して、取材の準備をした。

《少女取材中》

「それでは最後に、カルナさんが身に付けているその黄金の物は一体なんですか？」

「これか？　これは父スーリヤから授かった黄金の鎧と耳輪、これを身に纏っている限りオレは不死身だと父から聞いている。」

カルナが身に纏っている黄金の鎧と耳輪、これは物理・概念を問わずあらゆる攻撃やダメージを削減し、傷も即座に回復する高い自己治療能力を与える効果を持つ無敵の鎧。

神話では、カルナは黄金の鎧と耳輪を身に着けた姿で誕生し、鎧は皮膚の如くカルナの体の一部として繋がっていたため、脱ぐことは出来なかった。

本来ならばこの黄金の鎧と耳輪は生前にインドラに捧げて失ったもの。しかし、死後に父スーリヤがオレと一体化すると共に、黄金の鎧と耳輪を再び授けてくれた。

「あやくそれはとんでもない代物ですね」

「他に問いたいことはあるか？」

「いえ、これで十分ですよ。ご協力して頂き、どうもありがとうございます」

「こちらこそ、喜んで貰えて光栄だ」

「では私はこれにて失礼させていただきます。」

そう言いながらお辞儀をしたあと、射命丸は風と共にカルナ達目の前から突然姿を消した。

しかし、カルナには見えていた。射命丸は突然姿を消したのではなく、肉眼では追えないほどのスピードで移動したところを。

「とてつもなく速いな、まるでヴァーユだ」

「よし厄介者はいなくなったし、さっさと守矢神社に向かおうぜ」

「待たせてすまなかったな。それでは行くとしよう」

そう言う二人は再び移動を始め、目的地である守矢神社へと向かった。

途中、道草を食ってしまったが、争い事が起きなかつただけ良しとしよう。

それにしても、あの射命丸が言っていた『新聞』とは一体なんだったのか？

氷の妖精と大妖精

突然だが、カルナ達の目の前にあった広大な森林が焼け野原になってしまった。

幸い、周りを見渡しても人里のような集落は見当たらず、近くに紅い洋館が建っていたが無事ようだ。

燃え盛る森林は数キロ以上にも広がり、それに爆心地であろう場所には地面や岩石が融解して溶岩のようなものが発生していた。

魔理沙を始め、その場にいた妖精二匹はあまりの破壊力に唾然とした表情を浮かべ、地獄絵図と化した森林を前に声も出せずにいた。

このとき、この世の地獄を映し出すような光景を目の前にしても、カルナは平然としており表情を崩すことは一切なかった。

それも無理はない。地形が変わる程の小競り合いなど生前では日常茶飯事の出来事だったからだ。

何故、こんな災害のような出来事が起きてしまったのか、その原因は少し前に時間が遡る。

《〜数十分前〜》

射命丸に取材をされてから数十分過ぎた頃、カルナ達は霧が立ち込める湖の近くまでやってきた。

湖の近くには妖気が漂う不気味で大きな紅い洋館があり、その洋館の中から複数の強い気配を感じる。

遠くからでもはつきりわかるほどの強者の気配をカルナは見過ごすことはなく、迷うことなく魔理沙にあの紅い洋館に関して訪ねてみることにした。

「あの紅い洋館はなんだ？　中から強い気配を感じるが、多くの強者でも揃っているのか？」

「あれは紅魔館だ。言われてみれば、あの館の住人達はみんな強者だ

な。今度一緒に行ってみるか？」

「時間に余裕があれば同行させてもらおう。それより今は目的を果たすことが優先だ」

二人が湖の上を渡っていると、突然カルナの背後に向かって冷気を纏う無数の槍状の物が飛んできた。

背後を狙ったのは、恐らく不意討ちのつもりだろう。しかし、カルナは自分に向かって飛んでくる槍状の物体には既に気付いており、ある程度の距離に近づいてくるまで待っていた。

槍状の物体が射程圏内に入った瞬間、カルナは後ろを振り向くと同時に、手持ちである金色の槍を扱って、自分に向かって飛んできた槍状の物体を全て薙ぎ払った。

……ガシャーッ!!

薙ぎ払われた槍状の物体は原型を留めることなく、音と共に細かい破片となって砕け散る。まるでガラスのような美しい散り様だった。

それと同時に、近くにいた魔理沙もカルナに降りかかった攻撃によく気付くことになった。

「なんだ、なんだ!？」

「これは氷の槍か?」

カルナを襲った槍状の正体、それは今の季節では存在する筈のナイ、先が鋭く尖った無数の氷柱だった。

もしも氷柱で狙われたのがオレではなく、並みの人間が狙われていたら間違いなく致命傷を負い、下手すれば死んでいただろう。

「隠れていないで、その姿を現したらどうだ?」

氷の槍を薙ぎ払ってからしばらくすると、カルナ達の前に一人の少女が堂々とした態度で姿を現した。

髪は水色で、ふわふわのウェーブがかかったセミショートヘアに青い瞳。背中には氷の結晶に似た大きな羽を六枚持ち、頭の後ろに青い大きなリボンをつけている。服装は白のシャツの上から青いワンピースを着用し、首元には赤いリボンが巻かれている。

どうやらこの少女がオレに氷の槍を放ったそうだな、幼き身でありながら勇敢な心の持ち主だ。

「どうだ思い知ったか、あたいの縄張りに入ってくるからこうなるのよ」

「冷気を纏いし者よ、この氷の槍はお前が仕掛けたものか？」

「そうよ、もしかしてあたいの氷槍に恐れ入ったのかしら？」

「確かに常人ならば簡単に命を奪うことできるだろう。鋭く尖った氷を飛び道具にするとはい実に見事だ」

遠距離から狙える上に殺傷能力も十分ある、灼熱の場でなければ実践でも使える見事な攻撃法だ。

思い知らせるつもりが、カルナに自分の攻撃を称賛されて気に食わなかったのだろう。氷の少女は怒ったような表情でカルナに理不尽なほど当たり散らした。

「なによ！ あたいの攻撃を防いだぐらいで、ちよつとは驚いた顔しなさいよ、それともあんたバカなの」

「お前がそう思うのなら、それで構わない。それと用がないのならばオレ達は先を急ぎたい、立ち去っても構わぬか？」

理不尽に罵られても決して怒ることはなく、紳士的な態度で接してくるカルナ、しかしその態度が少女にとって逆効果なってしまうとは。

「ムキー、あんたの態度超ムカつくー!! こうなったらあたいの真の恐ろしさを知らしめてやらないといけないわね、覚悟しな……」

「……チルノちゃん」

このチルノとはこのおてんば少女の名前なのか、遠くから違う少女のような声が聞こえてくると同時に、こちらに急いでやってきた。

「もうチルノちゃん、知らない人を攻撃するのはダメだよ」

チルノと言う名の少女の前に、今度は礼儀正しそうな少女が現れた。

髪の色は緑、左側頭部をサイドテールにまとめて黄色いリボンをつけている、服は白のシャツに青いワンピースを着用しており首からは黄色いネクタイを付けて、背中には虫とも鳥ともつかない縁のついた一對の羽が生えている。

おてんば過ぎるチルノとは違って、現れたこの少女には礼儀と常識

が多少あるらしい。

「だって大ちゃん、こいつはあたいの縄張りに入ったんだよ、それに色々と超ムカつくし」

「だからって危害を加えるのは良くないよ」

大ちゃんと呼ばれる少女にチルノが説教を食らっているのを見計らい、魔理沙がコソコソとカルナに話し掛けてきた。

「大丈夫かカルナ？ 怪我とかないよな？」

「問題ない、それより魔理沙よ、あの者達は一体何だ？」

「あれは氷の妖精チルノと大妖精、見た通りイタズラ好きな妖精だよ。」

オレはともかく、イタズラであの氷の槍を人間に飛ばしたら一溜まりもないと思うのだが。まあ、それに関してはどうでも良いとしよう。

取り敢えず今はここから脱出して目的地を目指すことを優先しようとして魔理沙は考えていた。

「長居は無用だ、さっさと行こうぜ」

「承知した。」

チルノにバレないうちに早く退散しようとする魔理沙とカルナ、しかし世の中そんなにうまくはいかなかった。

この場から去ろうとするカルナにふと気づいたチルノは、逃がさないと言わんばかりに大声で呼び止めようとする。

「そこの白い頭、ちよつと待ちなさい!!」

「オレに何か用か？」

「あたいと勝負しなさい、どちらがさいきよーか白黒はつきりつけてやる」

この妖精はオレの力量を計れないうえに、自分の力量を理解していないのか？ しかし、それこそがこの妖精が勇猛果敢である理由なのだろう。

それに、例え相手の実力が自分よりも遥かに劣っていようとも、オレがやるべき事は一つ。

「良いだろう、相手になろう。」

「おい待てよカルナ、こんな奴を相手にする事はないだろ」

「何故止める？ 幼き少女の身でありながら勇敢に決闘を申込んでい
るのだぞ。ならばオレはその期待に応えなければならぬ」

魔理沙を押し退けてチルノの前に立ちはだかるカルナ、その姿は自
分と同等の強敵を相手にするような姿勢と心構えだった。

「我が名はカルナ、太陽神スーリヤの子。我が槍を恐れぬのなら掛
かってこい」

「あたいはチルノ、さいきよーの妖精」

「良い名だ。では勇敢なるお前に敬意を表して、オレはこの一撃を捧
げるとしよう」

「……えっ?」

そう言うとカルナは突然神々しい炎をその身に纏い、さらには炎で
形成された一本の槍を片手に握り締め、闘志の気迫を出した。

どうやらカルナは初っぱなから勝負を決めに来たようだ。最強と
名乗るチルノに最高の敬意を表すために。

「勇敢な妖精チルノよ、我が炎を喰らうが良い」

カルナは容赦も躊躇いもなく、炎で形作った槍をチルノに目掛けて
放り投げた。

「……えっ?! ちよつとちよつと!! なんなのよ、それはあー!!?」

このとき、チルノは慌てながらも槍を避けることが出来たので無事
だったが、炎の槍はチルノの背後にあった森林へ飛んでいく。

そして、その直後には爆音と共に広大な森林が焼き払われ、爆心地
に関しては地面や岩石が融解して溶岩が出来るほどの危険地帯に
なっていた。

そして今の地獄絵図に至る。

ちなみに本人達は知らないが、今のカルナの攻撃は最弱の部類に
入っている。

どんな相手でも挑まれば応えるとはいえ、この世界を破壊してし
まっては元も子もないからな。

恐怖のあまりに腰を抜かしたり気を失いはしなかったものの、氷の
妖精だけあって熱に弱いのか、さっきの爆風の熱をまともに食らっ

たことでチルノの身体は限界を迎えており、動くどころか声も出すことすら叶わなかった。

「今の一撃を見事避けたな、だが次は外さん」

「ちよつと待ったー!!!」

色んな危機を感じたのだろう。これ以上カルナを闘わせてはいけないと言わんばかりに、魔理沙と大妖精は必死にカルナを止めようとする。

このとき魔理沙は思った。カルナの力はデタラメ過ぎる。この先どんな事があってもカルナを闘わせては絶対にいけないと。

もし小競り合いでもされたら、それは幻想郷の危機に繋がることを意味する。それほどカルナの力に脅威と恐怖を感じていた。

「頼むカルナ、頼むからもう止めてくれ！ これ以上はやばいから、闘ったらいけないぜ」

「チルノちゃんは私が説得するので、どうかもう争いは止めてください。」

必死な表情で決闘を止めてくる二人を前に、カルナは身に纏っていた神々しい炎を消し去ると、闘志も完全に消え去った。どうやら闘うことを止めてくれるようだ。

「わかった、では決闘は止めるとしよう。」

そのカルナの言葉を聞いて魔理沙と大妖精はホッと胸を撫で下ろした。

そして決闘が終わったと分かると、大妖精はほとんど力尽きていたチルノを背負った。

この行動を見れば、大妖精が友人をどれだけ大切に思っていることがよくわかる。

「大妖精と言ったか、オレ達は先に向かっても良いのだな？」

「はい、どうぞ行ってください」

「すまんな魔理沙、先を急ごう。」

「まったくだぜ、厄介事はもう沢山だ。」

その言葉とは裏腹に、魔理沙は少し楽しそうな表情を浮かべていた。この短き旅も満更ではなさそうだな。

大妖精に見送られながら霧の湖をあとにして、二人は目的地へ向かって再び移動を始めた。

二柱の神と現人神

霧の湖にてチルノとの決闘を終えて、カルナ達は順調に守矢神社へと向かっていった。

徐々に強まり近づいてくる神の気配、恐らく守矢神社までそう遠くは無いだろう。

「守矢神社とやらは、もうすぐか魔理沙？」

「……………」

しかし、カルナに話し掛けられても魔理沙は返事どころか頷きもしなかった。

それも無理はない。カルナとチルノの決闘が終えてから、魔理沙はあることが気掛かりで浮かない顔をしていたのだから。

その気掛かりな原因は、チルノとの決闘でカルナが放った規格外の一撃。恐ろしく広大な森林を焼け野原へと変えたあの破壊力、天狗達や妖怪の賢者が見逃す訳はないだろう。

今回は森林が焼け野原になるだけで済んだが、天狗や妖怪が動くことになれば、今度は妖怪や人間の犠牲者が出るかもしれない。

「おい魔理沙、どうかしたか？」

「えっ!? いや、何でもないぜ」

慌てた表情で何かを誤魔化しているような魔理沙の態度、少なくとも何かオレに隠し事をしていることは確かだろう。

「お前から何か迷いの気を感じるのだが、本当に何でも無いのか？」

カルナに隠し事は通用しないと買ったのだろう。改めて恐れ入ったと言わんばかりに、魔理沙は感服したような表情を浮かべながら正直に答える。

「やれやれ、お見通しという訳か」

「オレに少しでも不満があるのなら気にせず言ってくれ、そうすれば多少は楽になるだろう」

「それじゃあよ、約束してくれカルナ、闘う事自体は別に構わない。ただ殺める事と幻想郷を破壊することだけは止めてくれないか？」

「承知した。それでお前の気が晴れるのならば約束をしよう」

乞いや頼みであれば、大小関係なく尊重に受け入れよう。況してや霊夢の友人であり、この世界と生物を大切に思った上での乞いなら尚更だ。

「本当だな!? それじゃあ約束だぜ」

魔理沙はまるで無邪気な子どものように嬉しそうな表情を浮かべていた。本当にこの世界を愛していることが良くわかる。

そんな事を話している間に、山の頂上に建てられている神社が見えてきた。

「着いたぜカルナ、あれが守矢神社だ」

《〜守矢神社〜》

本来ならこれを上るのだろう。山の頂上まで続いている長く高い石段を登りきった先には巨大な鳥居がある。

境内は派手な宴会場に成りそうなほどに広く、水汲み場や箒置き場も完備されていた。

御柱のような物体が建った神社は全体的に赤い屋根で、賽銭箱の前には手すりや階段がある。その両脇には緑に満ちた木々や草花が造形され、頂上に相応しい明るい造りとなっていた。

そして境内の真ん中には竹箒を両手に持って慎ましく掃除をしていた一人の少女がいた。

二人はその少女の付近へと舞い降りると、魔理沙が少女に向かって話し掛けた。

「よう早苗、遊びにきてやったぜ」

それに対して、魔理沙に話し掛けられた少女もこちらに気付くと、こちらに歩いて近づいてくる。

少女は胸の位置ほどまである緑のロングヘアで、髪の毛の左側を一房髪留めでまとめ、前に垂らしている。頭には蛙と白蛇の髪飾りが付いている。霊夢と同じような巫女装束を着ているが、色は少し異なる。

り、巫女装束は霊夢の赤の部分を青にした感じだ。

「魔理沙さん、珍しいですね」

しかし、早苗と言う少女の視界に飛び込んできたのは、黄金の鎧を身に纏い、この世の者とは思えない神々しい存在を放つカルナの姿だった。

「あの魔理沙さん、隣の神々しい殿方は誰ですか？」

「こいつはカルナ、霊夢の誤った神降ろしで呼ばれた神様だよ」

するとカルナの事で何か知っていたのか、竹箒を投げ捨て、少女は好機の眼差しを向けながら、飛び付くようにカルナの側に接近してきた。

「カルナって、もしかして施しの英雄カルナさんですか!？」

「オレの事を知っているのか？」

「はい！ インド叙事詩マハーバーラタに登場する不死身の英雄で、その聖人のような精神性から施しの英雄と呼ばれた人物、私大ファンなんですよ!!」

これは驚いたな。まさかオレの生涯が画かれている叙事詩が存在していたとは思ひもなかった。

それにしても人間の身でありながら神気を帯びているこの少女、霊夢と同じような身なりをしているが気配はまったくの別物。

神気を持つ半神半人なら、オレを含めて複数存在した。しかし純粋な人間の身でありながら神気を持っている者なんて見たことも聞いたこともない。

「申し遅れました。私はこの守矢神社で巫女を生業としている東風谷早苗と言います」

「早苗か、ところで人であるお前から神の気配を感じるが、これは一体どうゆうことなんだ？」

「私は現人神と言う神で、簡単に言えば生きた人間が神格化した存在ですね。」

「そんな神が現世にはいるのか」

大ファンのカルナに会えて嬉しそうに早苗が話している最中、魔理沙は恐る恐る早苗に話しかける。

「なあ早苗、私達は聞きたい事があって、ここに来たんだ」

「そうなんですか？ それなら立ち話もなんですから中でお話しをしまししょう。私もカルナさんに聞きたいことが沢山あるので」

この上なく嬉しそうな表情を浮かべている早苗に招かれる二人、知り合いだった魔理沙は戸惑いを隠せなかった。

こうして二人は早苗に守矢神社の中を案内されることになった。

《移動中》

二人は前を歩く早苗に導かれて内部へと入り、着いた先は民家の和室のような部屋だった。

特別変わったところは無い、少し大きめの畳で、五人くらいは住めるほどの広さがある。早苗一人だけだと思ったが部屋の中央にあるちやぶ台には、既に先客が腰掛けていた。

そこにいたのは神気を帯びた大人の女性と幼い少女の二人だった。「おや早苗、普通の魔法使いはともかく、その隣にいる優男の神はいつたい誰だい？」

早苗に話し掛けてきたのは変わった身なりをした大人の女性。

紫の掛かった青髪にサイドが左右に広がった非常にボリュームのあるセミロング。

冠のようにした注連縄を頭に付けており、右側には、赤い楓と銀杏の葉の飾りが付いている。

瞳は茶色に近い赤眼。そして背中には複数の紙垂を取り付けた大きな注連縄を輪にしたものを装着している。

上着は赤色の半袖。袖口は金属の留め具で留めており、赤い上着の下には白色のゆったりした長袖の服を着ている。

小さな注連縄が首元、白い長袖、上着の袖、腰回り、足首など、とあちこちに巻かれている。

スカートは、臙脂色のロングスカート。裾は赤色に分かれており、梅の花のような模様が描かれている。足は、裸足に草履。

見た目は大人な女性だ。

もう一人は金髪のショートボブ。青と白を基調とした壺装束と呼ばれる女性の外出時の格好に白のニーソックスをしており、市女笠に目玉が二つ付いた特殊な帽子を被っている。片方と比べたら随分とシンプルな格好だ。

見た目は完全に幼い少女。

「我が名はカルナ、お二方を神とお見受けするが」

「へえ、私らが神だと見ただけわかるのかい。大した洞察眼を持っているようだね

申し遅れたが、私の名前は八坂神奈子、この守矢神社の祭神」

「私は洩矢諏訪子、八百万の神だよ」

大人の女性の方が八坂神奈子、幼い少女の方が洩矢諏訪子と言う神様らしい。それに、この神社には二柱の神と巫女であり現人神の早苗が祀られているようだ。

「ところでカルナと言ったね、私達はあるあなたの気配には少し覚えがあるんだよ。

単刀直入に言うが、さつき霧の湖の近くにあつた森林を焼け野原に変えたのはあなたの仕業だろうか？」

「仰る通り、あれはオレがやったことだ。必要とあれば如何なる罰でも何なりと受けよう」

「いや、その件だが、潔いお前の精神性に免じて多目に見てやろう。幸い犠牲者は出てなければ、森林の火災も今頃は天狗達が鎮火させているだろうし」

「有難い慈悲、この上無く感謝する。」

このとき魔理沙も安心していた。森林を焼け野原と化させたカルナが重い罪で裁かれるのではないかと心配していたからだ。

「ところでカルナ、あなたの用件はいつたい何だい？　ただ神である私達に会いに来た訳ではないだろうか？」

「ああ、オレが元居た場所、神々の世界に帰還する方法を知りたい」

知っていると思つてカルナは聞いてみたが、それに対して神奈子からの返答はすぐには出ず、悩んだような表情を浮かべていた。

「神々の世界に帰還する方法ねえ」

「存在は知ってるけど、帰る方法なんて聞いたことも考えた事もないよ」

「早苗、あんた何か知らないかい？」

「これはカルナさんご両親のお話ですので、参考にならないと思うのですが。」

カルナさんの母クンティが若い頃、神を呼び出す真言マントラの力を試しに使って、太陽神スーリヤを呼び出したことがあるんですよ。

ですが、その真言マントラの本当の力は神を呼び出し、その子を産む事でした。

実際にスーリヤが現れると、クンティは怖くなってスーリヤに戻るように願います。

しかし、太陽神スーリヤは戻る前に真言マントラを実現する義務を負っていました。クンティは仕方なく、子が父と同じ黄金の鎧を身に着けるという条件で子を産むことを約束し、太陽神スーリヤの子カルナさんが誕生しました。」

まさか、見知らぬ世界でオレの誕生した話が聞けるとは、世の中なにかあるのか本当にわからないものだな。

自分の誕生した話を聞いて関心しているカルナに対し、隣で聞いていた魔理沙は何を思ったのか、顔を真っ赤にして動揺を隠しきれない状態になっていた。

「つつ、つまり霊夢とカルナは……、そつ、その、まさか？」

「これはあくまでも叙事詩での御話です。それに、聞いた話だと霊夢さんは誤った神降ろしの儀式でカルナさんと呼んだことですので、可能性は限り無く低いと思います」

「なっ、なんだよ。それを聞いて安心したぜ」

そよ早苗の言葉を聞くと、ホッと胸を撫で下ろして安心する魔理沙、いったい何を考えていたのやら。

しかし困ったなものだ。肝心な神の世界に帰る方法が見つからなかったとは、ただ色々な情報や話が聞けたので決して無駄ではなかったが。

「では改めて訪ねるが、神々の世界に帰還する方法を知ってそうな者

はいないのか？」

「そうだねえ、もしかしたらスキマ妖怪の八雲紫が知ってる可能性が高いかもしれないよ。」

「その者は何処にいる？」

「それは私等にもわからない。何せ神出鬼没の妖怪だからさ。ただ、あんたはあの騒ぎを起こしたから、近い内に会えるかもしれないかもね」

「ならば、その時が来るまで待つだけだ。重要な情報を頂き感謝する。」

そう言うところカルナは歩いて和室のような部屋から出ていこうとした。

その最中、もつとカルナに居座って欲しかったのだろう。慌てたような表情を浮かべた早苗がカルナを必死に呼び止めようとする。

「ちよつと待つてくださいよカルナさん、もう帰っちゃうのですか？」

もう少しゆっくりしてってくださいよ」

「その純粹な心遣い感謝する。しかし、オレは戻らなければいけない、オレに居場所をくれた者の所にな」

振り返もしなければ、その場に留まることなく、カルナは前を歩み続ける。

「ちよつと待てよカルナ、私を置いていくな！」

部屋から立ち去ったカルナを追い掛けて、魔理沙も部屋から出ていった。

二人が部屋から出ていったその後、神奈子は肩の力を抜くと、疲れたような表情を浮かべながら、その場で思う存分リラックスした。

「あのカルナ、とんでもなく高潔な精神を持った神だったわね。話してるこっちが疲れたわ」

「ただあいつ物凄く強いよ、私達二人でも敵うかどうかかわからない」

「そんなことわかってるわよ。それにしても残念だったね早苗、恋しい神と長く一緒にいれなくて」

「そんなことはないです神奈子様、また会えると思うので」

これが最後ではなく、また会える日は訪れるだろう。そう早苗は

思っていた。

だが、その言葉とは裏腹に、そのとき浮かべていた早苗の表情は少し悲しそうだった。

紅き館への招待状

守矢神社に行っていたカルナと魔理沙が博霊神社に帰還したあとのこと。

夕日が沈みきる前に魔理沙は自分の家に帰り、カルナは霊夢のところに居座らせてもらった。

その夜は霊夢の作った手料理を頂き、風呂に入ったあと、特に何も無く、カルナと霊夢は別々の部屋で眠りについた。

そして翌日のこと。

朝日が昇る前にカルナは目を覚ますと、すぐに身体を起こして布団から出てきた。

そして寢床にしていた布団をキチンと畳み、カルナは外に出ると、太陽神スーリヤに対して祈りを捧げる。

これは生前カルナが行っていた日課のひとつ、父であり太陽神であるスーリヤに対して毎日祈りを捧げること。

しかし改めて考えてみれば、今のカルナはスーリヤと一体化して神格化しており、云わば自分で自分に祈りを捧げていることになる。

そんなことを本人は気付かずに、カルナは一時間ほど祈りを捧げたあと、そのまま部屋に戻り、今度は霊夢が起きてくるまで部屋の真ん中で瞑想を始める。

そして瞑想を始めてから一時間後、カルナのいる部屋に向かって来る大きな足音が聞こえてきた。

「ちよつとカルナッ!!」

何の前触れもなく、鬼のような形相を浮かべた霊夢がカルナのいる部屋に怒鳴り込んだ。

それに対してカルナは動揺するどころか寧ろ落ち着いており、平然とした表情を浮かべている。

「血相を変えてどうした霊夢？」

「どうしたじゃないわよ！　これを見なさい！」

霊夢に突き出されたのは文字が沢山書かれた紙の束、それも文章の中には大きく『文々。新聞』と書かれていた。

「ほう、これが射命丸が言っていた新聞なのか」

記事をよく見てみると、そこには昨日カルナが焼け野原と化させた場所が写真で載せられていた。

炎で緑生い茂る森林は跡形もなく消え、残っているのは焦げ炭となつた樹木と荒れ果てた地表だけだつた。

新聞を読んだ霊夢の話だと、神奈子が言っていた通り、火の手が回る前に天狗達が森林を焼き尽くす炎を鎮火したらしく、幸いにも犠牲者はいなかつたようだ。

「あんた随分と派手に暴れたようね、いったい誰を相手にしたらこんな風になるのよ？」

「チルノと言う妖精と決闘したのだ。」

「あの馬鹿妖精、神相手になに喧嘩吹っ掛けてるのよ？」

元々馬鹿な奴だつたが、まさか神に喧嘩を売るほど馬鹿だつたとは流石の霊夢も思っていなかつたのだろう。

カルナの話の聞くと、流石の霊夢も頭を抱えて思わず呆れ果てた表情を浮かべてしまう。

「良いかしらカルナ、誰かを殺めたり幻想郷を破壊するような事があれば、私は神のあんたでも退治しないといけないことなるの、だからもう二度としないでちょうだい」

「ああ、承知している。魔理沙との約束でもあるからな。」

例え自分の身に危険が訪れようとも、オレは二人との約束を必ず守る。それがオレの信念であり、オレを受け入れてくれた二人に対しての恩義でもある。

嘘偽りの無いカルナの清々しい言葉と態度に、思わず霊夢も言葉を失ってしまったのだろう。呆れて果てた表情を浮かべ、口から溜め息が漏れてしまう。

「それにしてもカルナ、この一件で貴方は有名人よ、悪い意味でだけ

ど。」

「それで構わん。皆がそう思ってるなら、俺はそれで良い。」

「あんたは良くて、私からしてみれば大問題なの。少しは周りのことを考えてみなさいよ」

霊夢に指摘されてシヨックを受けたのか、カルナは落ち込んだような表情を浮かべ、しよんぼりとなってしまう。

カルナが霊夢に説教を食らっている最中、一体何の前触れなのか、突然吹いた暴風と共に射命丸が博麗神社へとやってきた。

「どうも皆さんおはようございます。新聞は見て頂けましたか？」

「朝っぱらから来るなんて珍しいわね射命丸。新聞ならこの通り今見てるわよ、カルナを叱りつけながらだけど」

「あややや、早朝から神様に説教とは流星は博霊の巫女、相変わらず恐れを知りませんね。」

「ところで用件は何なの？ 少なくとも私やカルナの様子をただ見に来た訳じゃないんでしょ？」

「そうなんですよ、実はカルナさん宛の手紙をお渡しに来たんですよね」

そう言って射命丸はポケットの中から紅い封筒を取り出すと、「どうぞ〜」と笑顔を浮かべながらカルナに差し出した。

それに対してカルナは紅い封筒を受けとると、すぐさま封を切って中身に入っていた手紙を見た。

しかし、母国の字ではなく異国の字だからか、カルナは手紙の文字がまったく読めなかったので、やむを得ず射命丸に手紙の内容を見せて問い掛けた。

「この紙には何と書いてあるんだ？」

「ふむふむ、これは紅魔館への招待状のようなものですね」

「コウマカんだと？」

確か守矢神社に向かう際に見た、霧が立ち込む湖の近くに立っていた紅い館のことか。

魔理沙から少し聞いた話だと、あの紅い館には沢山の強者がいると言っていたな。

「はい、どこかで紅い大きな館を見ませんでしたか？　それが紅魔館なのですが」

「ああ見た」

「その館の主がカルナさんと是非お会いしたいと書いてありますね」

「そうか、ならばその主の期待に答えるために、オレは今すぐ紅い館に行かなければならないな」

そう言うところから立ち上がり、紅魔館へ向かう準備をすぐに整える。

「行っても構わないな霊夢？」

「別に止めるつもりはないわよ、ただし大きな問題を起こさないことね」

「承知した。霊夢に迷惑を掛けないよう行動することを約束しよう」

そう霊夢に告げたあとカルナは部屋を出て行く。

そしてカルナは境内へ足を運んだあと、背中から炎を翼のように広げつつ足裏からジェットスの如く炎を噴射させて空を飛んだ。

紅魔館へと向かうカルナ、果たしてこの先に待ち受けているものは立ち塞がる困難か、それとも出会いや喜びに満ちた幸福か。

霧の湖でのリベンジ

紅魔館へ向かうために、カルナは神速の如く凄まじい速さで空を駆け巡っていた。

カルナの飛行速度は数分後足らずで紅魔館に到着するのでは無いかと思うほどに速く、人間の肉眼では目視することすら出来ないほどのスピードだった。

昨日、空を飛んでいた時は連れに魔理沙がいたため、速度をかなり遅くしていたが、今は単独行動をしているので幾らでも速度を上げて飛行できる。

それに、カルナが凄まじい速さで移動してるのには理由がある。それは紅魔館にいる強者と一秒でも早く会いたかったからだ。

遠くからでもわかった強者の気配、闘うことはなくても、その者から得るものはあるだろう。

故に表情には出さないものも、カルナは心を踊らせていた。異国の強者との廻り合いを、それはこれ以上に無い幸運だと感じている。

《……霧の湖……》

博麗神社を飛び立ってから数分足らずで、カルナは昨日通り掛かった霧の湖に辿り着いた。

確か此処には、氷を操る妖精チルノと大妖精がいた場所だったな。

以前会った時はチルノに決闘を申し込まれ、オレも期待に答えようと森一帯を吹き飛ばすほどの攻撃をした。

しかし、その時に発生した爆風でチルノが気を失った上に、魔理沙達に止められてしまい、決闘は強制的に中止となった。

出来ることなら不戦勝ではなく、十分に闘って勝利を納めたかった。

霧の湖を空から横行していると、聞き覚えのある声が突然カルナに向かつて飛んできた。

「……あつ！ また性懲りもなく現れたわね白い頭っ!!」

声の聞こえてきた方向に振り返ってみると、そこにはカルナに向かつて人指を差しているチルノがいた。

「また会うとは奇遇だなチルノ」

昨日、高温の爆風に当たって気を失い、大分弱っていたチルノだったが、今の元氣一杯な態度を見ると、心身共に問題は無さそうだ。

「昨日は意識失って引き分けになったけど、今日こそは決着を着けさせてもらおうよ」

「良いだろう、その勝負受けて立とう」

そう言うときカルナは手に持っている槍の矛先をチルノに向け、静かに構えを取った。

それに対してチルノは周囲が凍てつく程の冷気を身に纏い、氷で剣を二本作り出すと、すぐさま剣を両手に持って戦闘態勢に入る。

「……いくぞ」

「掛かって来なさい!!」

カルナは足からジェットスの如く炎を一気に噴射させると、瞬きをさせる暇も無いスピードで間合いを一気に詰める。

そして攻撃の許容範囲に入ると、カルナはチルノに向かつて容赦無く槍を振るう。

それに対してチルノも両手に持っている氷の剣でカルナの槍を受け止めると、追撃させる隙を与えないよう、咄嗟に反撃をする。

だが、チルノの武器はあくまでも氷で生成された物、カルナの黄金の槍に打ち勝てるはずがなく、数回打ち合いをただけで氷の剣は跡形もなく粉碎してしまう。

しかし。

「壊れても、また新しく作り直せば良いのよ!」

新たに氷の剣を生成すると、チルノは懲りずにカルナに向かつて斬り掛かる。

武器が碎ければ即座に生成して立ち向かう、それをチルノは何度も

繰り返す。恐らく周囲に冷気がある限り、武器を無限に作りだせるのだろう。

それから何度も武器を交えるうちに、カルナは薄々気付いていたことがあった。

それは周囲の冷気とチルノの氷の剣によって、自分が手に持っている槍が少しずつ凍り付いていたのだ。

「このまま氷漬けにしてやる!!」

長期戦になれば手が凍り付くのは目に見えている。しかし、それはあくまでも素人目線での話だ。

槍や手が凍り付く寸前、カルナは燃え盛る炎を一瞬だけ身体から発生させた。当然の事ながら手や槍を覆っていた霜は溶け、周囲が熱風に包まれる。

熱風に当たった瞬間、チルノは意識が飛びそうになったが、何とか堪えて体勢を整える。

「残念だったな、お前の冷気ではオレを殺すことはできない。」

第三者から見れば、この鬨いに圧倒的な差があることは素人目でもわかる。

氷精のチルノに対して、相手は太陽神の子であり、炎を自在に操るカルナ。高熱に弱いチルノからすれば、カルナとの相性が非常に悪い。

「なによ、あたいをバカにして！もう謝っても許してやらないんだから」

怒りの表情を浮かべてチルノは、カルナの頭上よりも高く飛行すると、今までに無いほどの冷気を纏うと同時に、周囲に無数の氷の槍を生成し出した。

「これでも喰らえええっ!!」

以前負けたことに余程腹を立てていたのだろう、後先考えずにチルノは無数の氷の槍をカルナに向かって絶え間無く降り注がせた。

四方八方から飛んでくる無数の氷槍、その圧倒的な数の前では避ける隙は皆無に等しく。流星のカルナも避けることができなかった。

黄金の槍でカルナは氷の槍を振り払うものの、あまりの数の多さに

全て対処することができなかった。

結果、対処仕切れなかった氷の槍はカルナの身体に何百本単位で容赦なく突き刺さってしまった。

「どうだ白い頭！ サイキョーのあたいを怒らせたら、こんな風に……って、あれ？」

しかし、どれだけ氷の槍を喰らっても、カルナはダメージどころか、掠り傷すら負うことはなく、チルノの攻撃がまるで通用していなかった。

「ちよつとちよつと!? あたいの攻撃を沢山受けて、なんで傷ひとつ負ってないのよ!？」

「限界の範疇を越えた攻撃、中々見事だった。だが、オレに傷を負わせるほどの殺傷力は持ち合わせていなかったようだったな。」

カルナが身に纏っている『日輪よ、具足となれ』カヴァーチャ・クンダーラは、太陽神スーリヤが息子を守るために与えた、太陽の輝きを放つ黄金の鎧と耳輪。

光そのものが形となった存在の黄金の鎧と耳輪は物理、概念を問わず、あらゆる敵対干渉のダメージ値を十分の一にまで削減する能力を持っており、神々でさえ破壊は困難とされる。

また致命傷に近い傷も即座に回復するほどの高い自己治癒能力も持ち、体に負った多少の傷であれば戦闘を行いながらも瞬時に完治してしまう。

「お前の攻撃はオレには効かないようだが、それでも闘いを続けるか？ オレはどちらでも構わんぞ。」

「うるさーい!! あたいを甘く見るなっー!!」

もはやカルナを倒す手段がなかったのだろう。自棄になったチルノは無数の氷の槍をもう一度カルナに向かって放った。

しかし、チルノが放った氷の槍が到達する前に、カルナはその場から姿を消してしまう。

「えっ?」

「……遅いっ!」

気配に気付いた時には既に遅かった。カルナはチルノの後ろに立っており、完全に背後を取られている状態だった。

次の瞬間、チルノは突然発生した竜巻に身を包まれると、何の抵抗もできずに天高く吹き飛ばされてしまった。

竜巻が静まり、空からチルノが落下してくると、そのまま湖に落ちて大きな水飛沫を上げた。

それから水面に浮き上がってくると同時に、天を見上げるチルノに對して、カルナは槍の矛先を向ける。

「勝負あったな」

「なによ攻撃もせずに見下して、あたいをバカにしてるの？ はやく一思いに止めを刺さないよー！」

「生憎だが不殺の約束があつてな、それはできない。」

槍を納めて後ろを振り向き、チルノに背後を見せると、その場からカルナは立ち去ろうとする。

「チルノよ、未熟ながら中々の闘い振りだったぞ。 お前と打ち合えたことを心から感謝しよう。」

そう言い残すと、カルナは紅魔館に向かって飛び去って行った。

それに対し、その場に残されたチルノはぼんやりとした表情を浮かべながら空を見上げ、水面にプカプカと浮かんでいた。

紅魔館へ

チルノの決闘が終わった後、カルナは難なく紅魔館の門の前まで辿り着いた。

周りを観察してみると、遙か北西には昨日出向いた妖怪の山が、湖の反対側には異国の館なのか廃墟のようなものも見える。

そして、湖に浮かぶ小島の少し高台になった場所に、赤いレンガ石で構成された城壁が大きな館を囲んでいる。何よりも目に止まるのが紅い館の大きさだ。

生前カルナは紅魔館ほどの立派な建物は数えるぐらいしか見たこととはなく、館と言うよりも城と思わせるほどの大きさだ。

紅魔館に入るには屋敷の門を通る必要がある。歩いていると、門の前には筋肉質には見えないほっそりとした女性が立っていた。

髪の色は赤く腰まで伸ばしたストレートヘア、頭には「龍」と一文字書かれている星型の飾りが付いた緑色の帽子を被っており、側頭部の髪を編み上げてリボンを付けて垂らしている。

服装は華人服とチャイナドレスを足して二で割ったような淡い緑色を主体とした衣装を着ている。目の色は青がかった灰色をしている。

「カルナ様ですね、お待ちしておりました。」

初対面のカルナに対して深く頭を下げる中華風の少女、察するにこの紅い館の守護を任されている門番と言ったところか。

それに、この門番が人間ではなく、龍の気配を持ち、強大な潜在能力を持つ人妖だということが人目でわかった。かなりの実力者なのだろう。

「俺の事を知っているのか、龍の気を纏う門番よ」

「はい、話はお嬢様からお聞きになっております。」

申し遅れましたが、私は紅魔館の門番を任されている紅美鈴と申します。」

女性らしい物腰柔らかな表情にも関わらず、美鈴という人妖は随分と固い挨拶をしてきた。侵入者を追っ払う門番という仕事柄の他に

も、来訪者を出迎えるための礼儀を教えられているのだろう。凜とした態度も垣間見えている。

それに、どうやら紅い館の主はオレのことを知っているらしい。この幻想郷に来てからまだ日が浅いというのに、凄まじいほどの情報力だ。

「どうぞお入りください、中でお嬢様がお待ちしております。」

「丁寧な出迎え、感謝する。」

門を潜るために美鈴の横を通ろうとした瞬間、カルナは自分に向けられて放たれる微かな闘志を美鈴から感じ取った。

その場に立ち止まり、カルナは横目で美鈴の方を見るが、美鈴の表情や態度は一切変わっていない。

だが、本質を見抜く能力があるカルナの前では嘘偽はもちろんのこと、弁明や欺瞞は無意味も同然。

カルナが立ち止まった直後、美鈴は物腰柔らかな表情を崩さずに口を開くと、カルナに対してこう言った。

「これは私個人の願いです、貴方とは是非とも手合わせをして頂きたいものです」

「ああ……それはオレもだ。機会があれば、その時は全力で闘おうでしょう」

美鈴という人妖、本当なら今ここでオレを闘いたいのだろう。だが、その有り余る闘志を剥き出しにしない我慢強さと理性は素晴らしいとしか言いようがない。

そう言葉を言い残すと、カルナは再び足を動かして前へと進み、紅魔館へと続く門を潜る。

カルナが門を潜った途端、鈍く響く轟音と共に門が閉じてしまった。そして目の前には、見事な造形美と隅々まで手入れが整っている庭が出現した。

吐息の漏れるほどに美しく整備された花壇や刈られた芝、敷地内の中央には彫刻が施された噴水まである。

そして何よりも気になるのが紅魔館、敷地に見合った西洋風の造り

で、門の外から見ると遥かに大きく広がって見える。
礼儀としてカルナは扉を三度叩くと、観音開きの扉は不気味な音を
立てて勝手に開き始めた。

？紅魔館？

紅魔館の中へと足を踏み入れたカルナを待っていたのは星と思し
き図形が描かれたエントランス。そこからは百人の子供が走り回っ
ても、まだ十分な面積を維持出来るほどの広大な床が広がっている。

全面が紅一色の絨毯で覆われていた。同じく真っ赤な壁にはタペ
ストリー、壮年の男性や若い女性の肖像画、数十メートルはある高い
天井には豪華なシャンデリアが吊り下げられている。それに気のせ
いか、館の外観に比べて内部がかなり広く見えた。

前方には上の階へと続く、手すりに羽らしき小さな装飾や球体が付
けられた大きな階段。行き止まりには大きな絵が飾っており、そこか
ら絨毯ごと階段が左右二手に分かれていて、どちらも二階へ通じてい
るようだ。

「カルナ様お待ちしております、ようこそ紅魔館へ」

目の前を見てみると、そこにはメイド服を着た少女が立っていた。

髪型は銀髪のボブカットで、もみあげ辺りから三つ編みに結って髪
の先端に緑色のリボンを付けている。

服装は青と白を基準色としたメイド服であり、頭には白いカチュー
シヤを装備している。

服装はオレの生きていた時代には存在しなかったものだが、察する
に屋敷の主の用人と言ったところか、だが門番の美鈴とは違い、こ
の少女は異能を除けば純粋な人間だ。

「お前は主の用人か？ それに他の者とは違って人間のようだが」

「はい、この紅魔館でメイド長を務めさせて頂いている十六夜咲夜と
申します。」

門番の美鈴もそうだったが、流石は主の用人と言ったところか、
来訪者を出迎えるための礼儀作法に無駄はなく、一つ一つの動きが洗

練されている。

それに礼儀以外にも、戦いの腕も方も相当手慣れていると見える。

「メイドの主任が出迎えとは、随分と手厚い歓迎だな」

「はい、カルナ様は大切なお客様、失礼の無いよう最高のおもてなしをするようにと、お嬢様から申し付けられております」

どうやら館の主は見ず知らずのオレを高く評価してくれているようだ。それだけでも幸福なのに、最高の出迎えまでしてくれれば、感謝の念が堪えない。

「早速ですが、お嬢様がお待ちになっているお部屋までご案内します。」

「ああ、よろしく頼む」

主の部屋の案内のために十六夜咲夜が歩き出すと、カルナも黙々とその後ろを着いていった。

ようやく出会う紅い館の主、果たして一体どんな人物なのか、このときのカルナはまだ知る由もなかった。

レミリア・スカーレット

……コンコン、ガチャ

「お嬢様、カルナ様をお連れしました。」

静かに扉を開けると、従者である咲夜は自分が部屋に入る前に頭を下げ、カルナを部屋に招き入れた。

部屋に入ってみると、やはり此処の部屋も隙間なく紅一色で統一されていた。

天井から吊り下げられた立派なシャンデリア、壁には乾燥したドライフラワーの花束や肖像画が飾られていて、床には満面なく敷かれた紅いカーペットの上に高そうな天蓋ベッドや大きなテーブルと二つの椅子、本棚などの家具が置かれている。

そして部屋を見渡してみると、カルナが確認したのは、人間で言えば10歳にも満たない幼い少女が椅子に座っている姿だった。

青みがかった銀髪に真紅の瞳、頭にはピンクのナイトキャップを被っていて、ナイトキャップの周囲は赤いリボンで締めている。

衣服は帽子に倣ったピンク色、太い赤い線が入りレースがついた襟に三角形に並んだ三つの赤い点、両袖は短くふつくらと膨らんでおり、袖口には赤いリボンを蝶々で結んでいる。

腰のところに赤い紐で結んでおり、その紐はそのまま後ろに行き先端が広がって体の脇から覗かせている。

スカートは踝辺りまで届く長さでこれにもやはり赤い紐が通っている。

また背中を見してみると大きな悪魔のような翼が生えており、パツと見て悪魔か吸血鬼を連想させる。

カルナが自室に来たことに気がつく、レミリアは椅子から立ち上がり、カルナに向かって上品にお辞儀をしながら挨拶する。

「初めまして不死身の英雄カルナ。私はこの紅魔館の主にして吸血鬼、レミリア・スカーレット」

「お前が当主か、館へ招いてくれたこと、心から感謝する。」

自分に対して挨拶してきたレミリアに対し、カルナも感謝の念を込

めてレミリアに向かって頭を下げながら礼を言った。

見た目は幼子のようなだが、それとは裏腹にとてつもない力を持っている。流石はこの紅い屋敷を治める当主の力量と言ったところか。

「どうぞカルナ様、こちらへお座りください。」

「すまない。」

従者の咲夜に手招きされて椅子に座るカルナ、テーブルの上を見てみれば入れたての紅茶や菓子などがカルナと主のレミリアの前に用意されている。

「レミリアと言ったな、お前はオレのこと良く知っているようだが」

「ええ、本で大体調べたからね、貴方の壮絶な人生にはとても感動を覚えたわ」

オレが来るのを待っている間に読んでいたと思われる本がテーブルの上に置かれている。文字は読めないのでタイトルがわからないが、とても分厚い本のようだ。

「でもおかしいわ、貴方は弓の名手よね？ どうして弓じゃなくて槍を持つているのかしら？」

「これは名残で使ってるだけだ。無論、弓も持ち合わせてはいるがな」

「それじゃあ貴方が持っているその黄金の槍こそが、もしかして神槍シヤクテイ？」

「いや、これは単なる槍だ。神槍は別にある。」

質問に対して無愛想に答えだけを述べるカルナ、話し相手であるレミリアはカルナに対して好意的な印象を持つことができなかった。

だがカルナ本人に悪気は微塵もなく、口数が少なく無愛想に話すのは、単純にコミュニケーションが苦手だからである。

「ところで、お前は何故にオレを招き入れた？ 何か目的でもあるのか？」

「興味があつたのよ、貴方自身に、そして貴方の壮絶な強さに」

このとき、今の発言によってカルナはレミリアの目的を確信した。

何かを悟ったような表情で何も言わず黙り続けるカルナに対して、レミリアは相手のことをお構い無しに話を続ける。

「どうかしら、この場で構わないから私と闘ってみない?」

「なるほど、やはりオレを屋敷に招いたのはそのためか」

レミリアを一目見た瞬間、薄々闘志のような気配を感じてはいた。恐らくはオレに対する好奇心から来るものなのだろう。

「ええその通りよ、貴方の強さを是非この身で確かめてみたいの」
「残念だが、それは無理な事だ。」

あくまでもオレは屋敷に招待された身、決して闘うために此処に来たわけではない。それにもし闘って問題を起こせば、また霊夢に迷惑が掛かってしまう。

そんなカルナの無関心な態度と一事足りない発言が相まって誤解してしまっただろう。レミリアの表情は一気に険しくなり、妖気と闘志が高まっていく。

「随分と嘗められたものね、私じゃ闘いの相手にすらならないと言いたいのかしら?」

「何故にそこまで怒りを覚える? オレはお前と闘う意味がないと言ってるだけなのだが」

「なら闘う理由を作ってあげるわ、後悔しても知らないわよ」

椅子から腰を上げた瞬間、その場でレミリアは高濃度の妖気で自分の身の丈よりも大きな紅い槍を作り出すと、その紅い槍でカルナの胸元を容赦無く突き刺した。

……が、しかし。

「なんですって!?!」

不意に突いたレミリアの紅槍はカルナの身体を貫くどころか、何か見えない鎧のような物で紅槍を防がれており、掠り傷すら付けることができなかった。

レミリアの攻撃を期に、カルナも槍を片手に立ち上がると、すぐさま紅槍を振り払って、レミリアに対して矛先を向けた。

「闘う気はなかったが、お前がその気であれば仕方ない。受けて立とう。」

「咲夜はこの場から去りなさい。巻き添えを食らうわよ」

レミリアにそう言われると、咲夜は主に対して軽く頭を下げてか

ら、この部屋から突然姿を消した。

「ほう、時間を止めての移動か」

「そんな余所見なんてして良いかしら？」

隙を突いてレミリアは、カルナの首を目掛けて紅槍を横に薙ぎ払った。

だが、自分に振り掛かってくる紅槍をカルナは手に持ってた黄金の槍で簡単に受け止めてしまう。

「余所見してすまない。つい珍しくてな」

紅槍共にレミリアを薙ぎ払い、間合いを開かせる。

「そんな無駄口、聞きたくもないわ」

しかし、休む暇も油断する暇も与えないと、怒りに満ちたレミリアはカルナとの間合いを直ぐ様詰めて攻撃を仕掛けてくる。

目にも止まらぬ閃光のようなレミリアの攻撃をカルナは防ぐ度に、槍と槍がぶつかり合うことで周囲に真っ赤な火花が飛び散る。

両者一步も引かずに繰り広げる激しい攻防、あまりにも強大なぶつかり合いに周囲の家具や壁にヒビが入る。

一見、互角のような戦いをしているようにみえるが、実はカルナの方が圧されており、レミリアの方が攻撃する手数が圧倒的に多かった。

「……………ッ!!」

次第にカルナは襲い掛かってくる無数の攻撃を全て防ぐことができなくなり、身体に攻撃を浴びるように受けてしまった。

そしてレミリアは突き、斬撃、薙ぎ払い、妖気の弾幕、考え付くありとあらゆる攻撃の手段を使って、カルナにダメージを与えようとした。

だが……カルナは無傷

どんなにレミリアが攻撃を命中させようとも、カルナの身体に傷を負わすことはできなかった。

これでは切りがないとレミリアは思ったのだろう、攻撃の嵐が収まると同時に、両者間合いを開けてインターバルを置いた。

このとき、カルナが涼しげな表情を浮かべているのに対して、一方

的に攻撃を仕掛けていたレミリアは少し呼吸を乱していた。

百を遥かに越える強烈な攻撃を浴びさせても尚、何故に自分の攻撃がカルナに通用しないのか、レミリアは事前に得てた知識で薄々気づいていた。

「なるほど、それが黄金の鎧なのね。」

「ならばどうする？ 潔く降参するか？」

そうしてくれるのであれば、こちらとしても有り難いことなのだが。

「冗談じゃないわ、貴方が全力を出すまで諦めないわよ」

「闘いを続行するのであれば、オレは別に構わない。だが、お前のその願いは叶わぬ願いだ。」

オレは誰かを殺したりしてはいけない。幻想郷を破壊してはいけないと霊夢や魔理沙と約束している。これは決して破ってはいけない制約だ。

『勝利』を意味する神弓『ヴィジャヤ』はもちろん、『梵天よ、地を覆え』や『梵天よ、我を呪え』を使えば紅魔館どころか、周辺の地形が跡形もなく吹き飛ぶだろう。

況してや絶対的破壊の一撃を放つ神槍『日輪よ、死に随え』など、発現させただけで幻想郷が崩壊することは目に見えている。

故に、オレは闘うことはできても、神器や奥義などを使って全力で闘うことはできない。オレを喚んだ霊夢が制約を全て撤回し、全力で闘い、無差別に殺せと言うのであれば別だが、そんなことは天地がひっくり返つても起こらないだろう。

しかし、そんなカルナの事情を知らないレミリアからしてみれば、ただ単純に戦いに手を抜かれてるうえに、自分を嘗めているようにしか感じられない。

例え相手が不死身の英雄であり神とはいえども、格下と見られている以上、それは吸血鬼としてのプライドが許すはずがない。

「どこまで私を侮辱する気なのかしらっ？」

「すまない、そんなつもりはないのだが」

「貴方のその態度もムカつくけど、何よりも闘う気力がまったく感じ

ないのよ、それに相当な手加減もしている。」

「オレの態度と闘い方に不快感を与えてしまったのなら、それは謝罪しよう。」

しかし実を言うと霊夢との制約があつてな、オレは誰かを殺めたり、この世界を破壊してはいけけないと言う約束を結んでいるのだ。」

それを聞いた瞬間、今までカルナが闘う気を持たず、手加減をしていた理由がわかったのだろう。レミリアは戦闘態勢を解除する。

「へえ…なるほど、貴方に殺気や闘う気がないのは霊夢との約束があつたからなのね。」

「ただ、その約束は自分の命が危険に晒されても、守り続けるのかしら？」

「無論だ。　霊夢が撤回しない限り、例えどんな事であろうとも、オレは霊夢との約束を守り続けよう。」

そもそも、約束によってオレが死ぬなんて事があれば、それはオレに圧倒的な非がある。」

全く平然とした表情でカルナは返答した。　言葉から滲み出るほどに伝わってくる絶大なる自信。そして、清々し過ぎるほどの英雄理念。

カルナの今の発言に納得し心を打たれたのか、レミリアは武器であつた紅槍を手放すと、満面な笑顔を浮かべながら大いに笑つた。

「なるほど、貴方とても気に入つたわ。」

「急に笑つてどうした？　闘う気を失つたのか？」

「ええ、闘いはもう止めにしましょう、貴方の理念に免じて私の負けで良いわ」

子供のように笑うレミリア、もはや殺気どころか闘う気力さえ感じない。

闘いを終えて周囲を見渡してみれば、今の戦いで家具や壁などが所々壊れてしまったようだ。　この現場を見た霊夢がどれだけ怒るのか、想像もつかない。

「部屋を荒らしたこと、深く詫びをする。」

「良いのよ気にしなくて、物が壊れたぐらい私にはどうってこともな

いわ」

当主のレミリアは実に寛大な器の持ち主のようだな。オレの誤った態度と発言で招いた戦いだと言うのに、レミリアはオレが家具や部屋を壊したことを一切咎めようとしなない。

「また遊びに来なさいカルナ、それと、霊夢との制約がなくなって戦うことになった時、今度はお互い手加減なんてしないで全力で戦いましょう」

「なるほど、つまり今回は手加減してくれてたのか。その配慮に深く感謝しよう」

「なんとというか……貴方、ちよつとずれているとか言われない？」

「……………？」

「まあ、良いわ。今日は館に来てくれてありがとう。とても楽しかったわ」

「用件があれば何時でも呼んでくれ、お前の頼みとあらば快く受け入れよう。無論、制約に引掛からない事であればの話だが」

「はいはいわかつているわよ、貴方は本当に律儀ね……尊敬しちゃうくらいよ」

その後の事はあつという間で、このとき既に長居は無用だとカルナは思ったのだろう。レミリアや咲夜などに見送られながら、カルナは紅魔館から去った。

色々と揉め事はあつたものの、カルナは博麗神社へ無事に帰ることができた。

異国の僧侶（バラモン）と妖怪の賢者

紅魔館から帰ってから翌日のこと。

昨日とは違い、異変が起こりそうな原因は特になく、比較的に平和な時間を送っていた。

縁側でのんびりしている魔理沙、そして庭で腕を組んで立っているカルナ。

しかし一人だけのんびりできず、何か嫌な予感を感じ取っていた者がいた。

その人物は霊夢。魔理沙と共に縁側で座っているがのんびりとはしておらず、不穏な表情を浮かべている。

「どうした霊夢？ 何か不快なことでもあったのか？」

「何かずつと前から嫌な予感がするのよね」

「あつはっはっは、また巫女の勘ってやつか？ 霊夢の予感は大体的中するからな」

そんな事を話している最中に、霊夢の嫌な予感的中することになる。

霊夢達のいる場所へ歩いて向かってくる人影が五人ほど鳥居の方向から見えた。

そして五人が霊夢達の近くまでやって来て、二人がその正体に気がつくくと、霊夢は驚いて嫌そうな表情を浮かべ、魔理沙は物珍しそうな表情をした。

「げっ、何であんた達が？」

「おお？ 珍しい顔触れが来たな」

やってきたのは四人の妖怪、そしてそれを率いる人間でも妖怪でもない強大な力を持つ女性。

五人の存在を知っている霊夢や魔理沙に対して、何も知らないカルナは無意識に戦闘の態勢に入る。

「何者だ？」

カルナが最初に話しかけたのは、四人の筆頭にいる女性だった。

金髪に紫のグラデーションが入ったロングウェーブ、瞳の色は金

色。服装は白黒のゴスロリ風のドレス姿に表地が黒色、裏地が赤色のマントを羽織り、黒いブーツを履いている。

「初めまして日天様、私は命蓮寺というお寺で僧侶をしている聖白蓮と申します」

何か生前に関わりがあつたのか、僧侶と言う言葉に珍しく反応するカルナ。

それも無理はない。呼び名は違えどカルナが生きていた時代にも僧侶はいたのだから。

「異国の僧侶？^{バラモン} 見たところ魔理沙、お前と同じ魔法とやらを使う者のようだが」

本人は僧侶とは言っているが、靈力や法力ではなく妖力や魔力などの類いを感じる。それにこの白蓮と名乗る者は妖怪でも人間ではないようだ。

「性質は異なるけど、確かに白蓮とは同業者だぜ。それにしても相変わらず凄い洞察力だよな、カルナの眼は」

「大したものではない。」

白蓮を筆頭に背後には四人の妖怪がいるが、中でも一人だけ生前から知っている気配を持つ人物がいた。

虎の体色のような金と黒の混ざった髪を持ち、頭上に蓮のような花を模した飾りを乗せている。

服装は虎柄の腰巻きをつけ、背中には白い輪を背負っている。また左手には背丈よりも長い鉾を、右手には宝塔を持っている。

知っている気配の名はヴァイシユラヴァナ、つまり日本の呼び名で言うのであれば。

「お前は毘沙門天の化身か、まさかこんな形で出会うとはな。」

「お会いできて光栄です日天様」

「何だよカルナ、虎丸と知り合いだったのか？」

「いや、初対面だが。」

あくまでも名前と気配を知っただけで、ヴァイシユラヴァナ及び毘沙門天との面識は生前にはない。

白蓮が信仰する仏教とは元を辿ればインド、細かく言うとヒン

ドゥー教やバラモン教などが原典だと言っても過言ではない。

その例に、仏教にて帝釈天と呼ばれる神は宿敵アルジュナの父であり神々の王であるインドラ、破壊神シヴァであれば大黒天、最高神の一柱であるブラフマーは梵天と呼ばれている。

「それで、異国の僧侶よ、何の用でオレの前に現れた？」

「単刀直入に言いますと、是非とも寺に招き入れたいと思い、貴方様の元に訪れました」

「なるほど、それはつまり、オレを神として信仰するためか」

「はい、仰る通りです」

その言葉を聞いてカルナは無言になる。元々無口で無愛想な人物だったので霊夢達からしてみれば何も珍しいことではない。

そして数分の時が経過した頃に、ようやくカルナが口を開いて答えた。

「残念だが、その願いを聞き入れることはできない。できることから別の願いにしてくれると助かる」

「それは何故ですか？」

「過ちとはいえ、この世にオレを呼び出したのは他ならぬ霊夢だ。

故に、今の主は霊夢であり、その事実が存在する限り、オレは主を変える気はない。」

忠誠心の塊とも呼ぶべきか、底抜けに義理堅いカルナの言葉に、周囲の者達は思わず息を飲んでしまう。

そんなカルナの言葉を前に、流石の白蓮も諦めたのだろう。笑顔を浮かべながら言った。

「なるほど、そう言う理由ですか」

「ああ、そもそも、オレは主のために闘うだけの戦士だ。神の器ではない。」

父のスリーヤと一体化しているとはいえ、俺は誰かに崇められたり信仰される程の者ではない。ただ主のために槍を振るい、戦車に乗り、弓を引いて闘うだけの戦士なのだから。

「それでは今度、一日だけ寺に来て頂うというのはどうでしょう？

神として迎えるのではなく、日天様が妙連寺を拝観する形ということ

で」

「わかった、約束しよう」

「用件はそれだけです。それでは私達はこれで失礼します。」

そう言うとき白蓮を筆頭にその後ろにいる四人はカルナ達に向かって頭を下げると、歩いて博麗神社から去っていった。

白蓮達がいなくなった途端、はあく大きく溜め息をつく霊夢、余程あの空気が重かったのだろう。

「本当に律儀ね、私のことなんてどうだって良いのに」

「オレがいると不満か？」

「そういう意味で言ってる訳じゃないわ、あんたが傍を離れると、何をやらかすかわからないからよ」

半分本心で言っているが、もう半分は違い、何か別の意味があるらしい。それが何なのかはカルナも良くわかっていない。

白蓮達がいなくなって一安心すると思いきや、次にカルナは霊夢でも魔理沙でもない者に対して言葉を言い放った。

「さて、そこにいるのは誰だ？ 隠れてないで颯爽に姿を現せ」

「あら、お見通しという訳ね」

異空間から突然姿を現したのは妖しい金髪の美女だった。

腰まで伸ばした金髪、頭には赤いリボンが巻かれた白いドアノブカバのようなナイトキャップを被っている。衣服は紫と白色を基準とした八卦の萃と太極図を描いたような中華風の服を着ている。

金髪の美女を見るや否や、霊夢はまた絶望したような表情を浮かべて落ち込んでいた。

「まったく次から次へと、今日は厄日だわ」

「どうも初めまして施しの英雄カルナ、私の名前は八雲紫」

聞いたことある名前だった。それも無理はない、以前守矢神社に出向いた時、八坂神奈子から聞いた名なのだから。

「お前が八坂神奈子が言っていた妖怪か、聞いたところ神々が住まう世界に帰る方法を知ってる唯一の人物と耳にしている」

「知ってるわよ、貴方を元にいた世界に帰す方法」

しかし、カルナは喜びを表情に出すことなく、代わりに驚き喜ん

でいたのは傍にいた魔理沙だった。

「本当か紫?! 良かったなカルナ、これで帰る方法が見つかるぜ」

「今すぐ案内するわ、こちらへ来なさい」

普通なら喜んで八雲紫の元へやって来るだろう。だが何かを感じ取っていたのか、カルナは立ち止まっているだけで、八雲紫に近づくことはなかった。

「ああ、それが真実ならば願っても無いことだろう。だが虚言を吐いてまで、オレを招き入れようとするのは何が目的だ？」

カルナに嘘を見抜かれた途端、八雲紫から笑顔が消え去り、冷徹な視線でカルナを見つめてきた。

「貴方、さとり妖怪並みに厄介ね。」

「なるほど、それが本性か」

「ええ、特にその黄金の鎧って言ってたかしら？ 私の能力を拒む物は」

物腰柔らかな態度から冷徹な態度へと豹変した八雲紫に驚くことも臆することもなく、平然と真つ直ぐな視線を向けるカルナ、流石はインドの大英雄と言ったところか、肝が座っている。

「まあ良いわ、幻想郷は全てを受け入れる。貴方がこの世界に訪れたことを歓迎しましょう。」

「感謝する。」

「ただし下手に力を使わないことね。もし幻想郷を破滅に導くものなら、幻想郷全てが貴方の敵になるわよ」

「心得よう」

「まあ……とは言ってみただけど、考えてみれば、貴方を殺せる者なんて、三界のどこにもいないわよね」

恐らく八雲紫はカルナの力を本気で認め、評価しているのだろう。少なくとも今の言葉に嘘はない事ははっきりとわかっている。

叙事詩『マハーバーラタ』で、カルナは幾度の敗戦や敗走はしても、決して死ぬことはなく、それがカルナの最大の強みとも言える。

「じゃあねカルナさん、お互い仲良くしましょ」

そう言うのと八雲紫は手をゆつくりと振りながら異空間へと入り込

み、その場から姿を消し去った。

「ひえく怖かった。まさか紫があんな目付きで睨むなんて、初めて見たぜ」

不穏な空気から解放されて、周りから緊張感が一気に無くなると、安心して胸を撫で下ろす魔理沙。

「それにしても、あんた随分と力を買われているそうね、あいつがあんなこと言うの初めて聞いたわ」

「それは過剰評価のし過ぎだ。生前の頃、オレに勝る英雄は数多いたからな」

パーンダヴァ五兄弟を始め、宿敵アルジュナの友であるクリシュナ、バラモン最強の戦士であり戦友のアツシユヴァッターマンなど、どの英雄も負けず劣らず、オレに勝る能力を持っている強者達だ。

それを聞くや否や、霊夢は恐ろしげな表情を浮かべて、ゾツとしたのか鳥肌を立てていた。

「あんたみたいな奴が沢山いる世界なんて、想像するだけでゾツとするわ。」

後に聞いた話だが、このとき霊夢は現在修行をしている神降ろしを本気で止めようかどうか考えていたらしい。理由は勿論、カルナのようなインド系列の神を万が一でも下ろさないためである。

「なあなあ、どんな英雄がいたんだ？ すっげえー気になるから詳しく聞かせてくれよ」

「魔理沙が知りたいのであれば話そう、つまらないかもしれないがな」

聞き手である魔理沙は終始目を輝かせながらカルナの生前に出会った人物の他にも、クルクシェートラ戦争などの話を聞いていた。

学問を学びに

聖白蓮率いる妙蓮寺のメンバーと八雲紫が来てから数時間が経過したあとのこと、カルナは魔理沙に自分の思い出を話していた。

「いやあくカルナの世界にいた英雄達は凄いな、色んな強い奴がいて」

恩師ドローナやパラシユラーマ、宿敵パーンダヴァ五兄弟、アルジュナの友クリシュナ、僧侶最強の戦士アシュヴァッターマン、主君ドウリーヨダナとカウラヴァ百人兄弟など、知っている英雄達を魔理沙に全部話した。

そして最後の締めには、自分の生涯の幕を閉じるきつかけとなったクルクシエートラの戦いを知ってる限り教えた。

「俺の話を聞いて楽しんでくれたか、結構なことだ。」

「中でもカルナの主君はとても面白い奴だな、他の英雄と比べて人間臭いというかなんというか、なんか親近感が湧いちゃうんだよな」

「ドウリーヨダナのことか、奴は厚顔で小心な男だが、俺を救ってくれた掛け替えの無い恩人だ。」

ドウリーヨダナ、アルジュナ達と対立したカウラヴァ百王子の長兄であり、商人ヴァイシャだったカルナをアング王国の王位につけて王族クシャトリアにした、カルナに取っては掛け替えの無い恩人であり親友でもある人物。

とてもお調子者な性格であり、すぐ調子に乗って、失敗するとこの世の終わりのように落ち込み、すぐ立ち直る。アツプダウンが激しい人物である。

「でもさ、話を聞いてると、やっぱりカルナの人生は悲劇的じゃないのかな？ 呪いを掛けられたり、黄金の鎧とかを奪われたりしてき、明らかに理不尽じゃないか？」

「お前にはオレの人生が悲劇や理不尽に満ち溢れているように見えるか、だがオレは自分の歩んできた人生に何の後悔も無い。しかし、強いて我欲を言うのならば、我が宿敵アルジュナと思う存分に闘いたかったことだ。」

あらゆる苦難・理不尽すら全て「それも有り」とし受け入れ、それでいてそれら全てを恨むことは決してない、それが英雄カルナの信条

であり生き方でもある。

そんな聖人染みた人生を歩むことなんて魔理沙はそんなことは決して出来無い、真似することもできない。カルナだからこそできる偉業だと、そう思っていた。

「やっぱり凄いやカルナは、私には到底だけど真似出来ないぜ」

そんな会話を長々と話していると、二人のいる元に霊夢がやってきた。

「ちよつとカルナ、そこにいるの？」

「どうした霊夢、オレに何か用か」

「あんた暇でしょ？ 折角なんだから寺子屋に行ってきたらどう？」

聞き慣れない言葉に疑問を抱くカルナ。それも無理はない、そんなものはカルナがいた世界には存在しなかったのだから。

「寺子屋、それは一体どんな場所だ？」

「子供達が学問とかを学ぶ場所のことよ、あんたこの世界のこと何にも知らないんだから、寺子屋に行つて少しでも知識を付けてきなさいよ」

「なるほど教養のためか、悪くないことだ。」

少しでもこの世界の文化などを知ることができれば、主である霊夢の助けになるだろうと思つたのだろう。カルナは寺子屋に行くことに何の躊躇いもなかった。

「と言うわけよ魔理沙、あんたも暇だろうしカルナを寺子屋まで連れて行つてあげなさいよ」

「なんで私なんだよ、霊夢が行けば良いじゃないか」

「私は忙しいから駄目なの、文句言わないでさっさと行つてきなさいよ」

どうせ家でゴロゴロしてるだけだろうと思つたのだろう、魔理沙は不満そうな表情を浮かべていた。だがカルナと一緒に何処かに出かけるのは満更でもないようだ。

しかしカルナは霊夢に対して一切の不満を持っておらず、機嫌を損ねた魔理沙を宥めようとする。

「仕方ない魔理沙、どうやら霊夢には他に仕事があるらしい。また神

降ろしをするかもしれん」

「言つとくけど神降ろしなんて絶対にやらないわよ、あんたみたいな天変地異を引き起こす神なんて、もう降ろしてたまるものですか」

誤った神降ろしをするのを余程恐れているのだろう。このときの霊夢は絶対に神降ろしをしないと云わんばかりに必死な表情をしていた。

「……………」

「そうなのか」

何に落ち込んだのかはわからないが、カルナは珍しく肩を落とし残念そうな表情でそう答える。

このとき霊夢と魔理沙の二人はカルナのことを何事にも動じない奴かと思っていたが、他者から直球で指摘されると脆い一面があることを初めて知った。

「まあまあ、そんなに落ち込むなよ。　　気を取り直して寺子屋に行こうぜ」

「そうだな、ずっと落ち込んでいるよりも、迅速に行動した方が賢明な判断だ。」

さつきまで落ち込んでいたはずが既に立ち直っている。流石はカルナ、ポジティブ思考で気持ちの切り替えがあまりにも早い。

「それじゃあ寺子屋に行こう。　　ついでに人里も案内してやるぜ」
「承知した。」

そう言うのと魔理沙はあらかじめ所持していた箒に乗って空を飛び、カルナは両足の裏から炎をジェットのように噴射させて飛翔する。

人里に向かうカルナと魔理沙、果たしてその先に待っているのは一体何か？

人里へと

博麗神社を出てから数十分後のこと、カルナと魔理沙は特に事件に巻き込まれることも、一悶着も無く人里へと到着した。

人間の里に建つ家々は全て、現代にも拘らず江戸時代の町並みを感じさせる庶民的な造りだ。レンガとか石造りの壁、鉄筋やコンクリートなどという技術が必要とする材料は一切使用されていない。

博麗神社にいたときから大体予想はしていたが、やはり服装や建物、文化や季節など、カルナがいた世界の人里とは大きく異なっていた。

「どうだカルナ、初めてきた人里の感想は？」

「やはりオレのいた世界とは違うな、人も物も、初めて見るものばかりだ。」

絶世の美男子だが、目付きは鋭く、幽鬼のような白い肌と黄金の鎧、そして他人を引き付けない神々しい気配が目を引くのだろう、周りの人達は皆カルナの姿を見て呆然としていた。

「自意識過剰かもしれないが、オレを物珍しそうに見てる者が多くいるように感じる」

「そりゃあそうだろうな、そんな派手な金色の鎧を着てたら、誰でも見るだろうぜ」

ほぼ毎日傍にいる魔理沙に取ってはカルナは特に珍しくもないだろうが、見知らぬ者から見れば異常にしか見えない。

「おつ、見えた見えた。寺子屋はあそこだ」

二人は寺子屋のある場所へと歩いて向かう。

《寺子屋》

寺子屋の中に入り、先生と子供達の居るであろう教室へ行くために縁側を歩く。無論魔理沙に連れて行かれてである。

教室へ入ると、そこには立っている先生と沢山の子供達が座っていた。しかし人間の子供以外にも妖怪や妖精の子供もいた。

先生の容姿は腰まで届こうかというまで長い、青のメッシュが入っ

た銀髪。頭には頂に赤いリボンをつけ、六面体と三角錐の間に板を挟んだような形の青い帽子を乗せている。この帽子は赤い文字のような模様が描かれている。

衣服は胸元が大きく開き、上下が一体になっている青い服。袖は短く白。襟は半円をいくつか組み合わせ、それを白が縁取っている。胸元に赤いリボンをつけている。下半身のスカート部分には幾重にも重なった白のレースがついている。長い。

しかし、二人の存在に先に気づいたのは先生ではなく、今まで二度対面したことがある妖精であった。

そう。チルノである。

「あー!! また性懲りもなく現れたわね白い頭!」

「チルノか、まさかこんな所でも合うとはな、もはやこれは宿命なのかもしれないな」

二度だけでなく三度相まみえるとは、これは運命としか言いようがない。

「今ここで決闘よ、今度こそあたいが勝つから覚悟しなさい」

「良いだろう。お前が納得するまで打ち砕いてやる」

槍の矛先を向けて闘おうとするカルナ、この場に先生や子供達がいるのにも関わらず始めようとする。

「こーら、寺子屋で喧嘩はいかんぞ」

そういうと先生と思われる人物は両手でチルノの頭を掴んで思い切り頭突きを喰らわした。

「あいたっ!!」

先生の頭突きがかなり強烈だったのだろう。額を真っ赤にしてチルノは気絶して倒れてしまう。

そして、チルノに対するお仕置きが終わると、次に先生の視線はカルナへと向けられた。太陽神であるカルナに向かってあの強烈な頭突きを食らわすのか。

「あなたはそうね……初対面だし今日は大目に見て頭突きは勘弁してあげるわ、だが次は無いと思え」

「そうしてくれると助かる。」

「よう慧音、相変わらずの頭突きだな」

「魔理沙久しぶりだな、この青年と何しに寺子屋に来た？」

「幻想郷のことを学びに来たんだ、ちなみにこいつの名前はカルナ、確か太陽神スーリヤの子」

「ほう、この青年は神なのか。道理で神々しい存在感を放つわけだ。それに強さも尋常ではない。恐らく幻想郷でも一二を争うほどの実力者だ。流石は万全であれば三界を単独で制覇することができる戦士だ。」

神々しい存在感を放つのはどうやら黄金の鎧を着ているからかもしれない。光そのものが鎧になった宝具、神々が作り出した神造武器なのだから。

「名前はカルナと言ったな、印度に伝わる伝説の大英雄の一人。アルジュナの宿敵。私は上白沢慧音、この寺子屋で子どもたちに勉強を教えている先生をしてる者だ。よろしく」

「子を守り、民を守り、そして導く者か。半人半獣の身でありながら王のような在り方をする。お前はそうすることによって何が目的だ？」
「別に何も求めてないさ、ただ皆が笑顔で楽しく過ごしてくれれば良いのよ。」

「なるほど、お前は聖人だったか」

「貴方ほどではないさ。望めば血肉である鎧を神に捧げ、あらゆる呪いを受けて最後に弟に殺されても誰も憎まず恨まずこの世を去っていた貴方には。」

「俺のことを知っているようだが、やはり伝わっているのか？」

「そりゃあもちろん、私は歴史が大好きだからね。もちろん貴方の叙事詩も読ませて貰っているよ」

「そうか」

「さて、今回の授業は特別教え子としてカルナ様もいることだし、外の世界に伝わる神話『マハーバーラタ』の授業でもしよるか」

「せんせい。まはーばーらたってなんですか？」

「よく聞いてくれた。マハーバーラタというのは簡潔に言ってしまうば外の世界の昔話だ。様々な神や英雄達が集う集大成。」

アルジュナ、パーンダヴァ五兄弟と言う英雄を中心として物語が進むとても長いお話だ。

そこにいるカルナ様も出てくるぞ」

子供達は一斉にカルナの方向を見た。この方は凄い方、物語の世界からやって来た伝説の方だと。

それに対してカルナはマハーバーラタの簡単な説明を聞いてどこか不服そうな素振りを見せる。

「アルジュナが中心という事は、オレは敵という立場と言うわけか」

「まあそうだな。話によればパーンダヴァと敵対していたカラヴァ族であるドウルヨーダナの仲間というわけだったわけだが」

だがカルナ様は自分が王族だと知り、パーンダヴァが自分の兄弟と知ったうえでドウルヨーダナ側についたんだろ？」

「ドウルヨーダナはオレを助けてくれた掛け替えない恩人であり最愛の友だ。裏切ることはできなかった。」

「それとアルジュナを打ち倒すためでもあるだろ？ 相当ライバル意識を持っているように感じたが」

「そうだな、確かに宿敵として見ていた。」

「競技場に飛び入りで出場したのも、アルジュナの対抗心だったんだろ？」

「見てはいられなかった。アルジュナが許せなかった。」

普段誰も羨まず、誰も憎まないはずのカルナだったのに、アルジュナの弓の技術を目にしたことで消極的な姿勢を守り切れず、飛び入りで競技に参加しアルジュナに並ぶ武芸を披露した。

「せんせえーさつきから二人で何はなしてるんですかー？」

「すまんすまん、物語の登場人物が目の前にいるもんで、色々質問したかったんだ。さて、授業に戻るか」

そうして上白沢慧音によって子供たちはマハーバーラタについて授業することになる。

様々な英雄、神々、そしてドウリーヨダナによって引き起こされる戦争、物語は聖書四冊分になるので、子供たちにマハーバーラタ全ては教えることはできなかつたが、できるだけわかりやすく、そして簡

潔に教えることだった。

大英雄への質問

「という話だ。みんなわかったかな？」

簡潔とは言え、大長編であるマハーバーラタの音読を終えて、慧音先生は子供たちに対してわかったかどうか聞いてみる。

「そーなのかー」

「さっぱりわからなかったけど、白い頭が負けていい気味だったわ。あたいだったらアルジュナを一瞬で氷漬けにしてやるのに」

カルナを侮辱し、物語の主人公であり、極めて優秀な武芸の腕前を持ち、神々から様々な武器を与えられたアルジュナにさえ喧嘩を売ろうとするチルノ、闘ったら間違いなく弓矢で蜂の巣にされるとも知らずに。

しかしカルナは怒りもしなければ、寧ろ平然としていた。

もう結末を迎えて、終わった話なのだ。況してや子供の純粋な感想なのだから、潔く受け入れようと思った。

だが、やはり物語として自分の生涯を聞いてみると、アルジュナほどの英雄が道義に反してまで自分を倒そうとする事に喜びを覚え、奇妙な誇りを抱く。

チルノやルーミアが自分勝手に感想を述べているのに対して、一人の少女が手を上げた。

髪の色は緑、左側頭部をサイドテールにまとめ、黄色いリボンをつけている。服は白のシャツに青い服を着用（これは人によって描き方が変わり、上下に分かれていたりワンピース状だったり様々）。首からは黄色いネクタイやリボンを付けていることも多い。その背中からは虫とも鳥ともつかない縁のついた一對の羽が生えている。

彼女の名は大妖精、チルノの友達である。

そして、先生ではなく、カルナの方向を見て、直接質問しようとする。

「カルナさん。私の疑問なんですが、なぜ敵の神様に自分の命よりも大切な黄金の鎧を与えたのですか？」

もし渡してなければライバルに勝てたかもしれないのに、どうして

自分の命を縮めるようなことをしたんですか？」

少女の純粹な質問、そして嘘偽りのない言葉、大妖精にはカルナの行った行動がわからなかったのだ。

確かにこの大妖精の言う通り、インドラ神に黄金の鎧を与えなければ死なずに済んだ。アルジュナにも勝てたかもしれない。親友ドゥリーヨダナに勝利を与えていたかもしれない。

しかし、それで施しを拒み、戦いに赴くのは、父スーリヤの威光を汚すことも同然、カルナにとっての敗北に等しいからであった。

何しろ、その為だけに生きてきた。自らを産み、育ててくれた者たちに胸を張れるように生きてきたカルナにとって、自らの命は、自身のものですらなかった。

父スーリヤへの不敬となるが、カルナの背負う太陽の火でもなく、絶対的なスーリヤの輝きでもなく、人間が見せる不完全な魅力こそが太陽だと。

「オレのやるべきことだったからだ。そもそも、施しを拒絶することは、オレの信条に反することだ。それに父の威光を汚すこともできなかった。」

与えることが幸せだった。それが大切であればあるほど幸せは高まる。それに与えるものとして、命を犠牲にしても名声を守りたかった。そして信仰していた父の威光を汚さないように。

それに対して、大妖精はカルナの考えや信条、そして清々しいほどの英雄理念が理解できなかった。何も言わなくても、表情がそう言っていた。

「私にはカルナさんのことがわかりません。自分の命を犠牲にしてまで大切にすることがわかりません」

「オレにはオレの考え方ががある。つまらぬことで悩むな。」

「はい……」

言葉が足り無すぎたのか、カルナの発言に対して大妖精は悲しそうな顔をした。まるで自分が悪いかのよう。

通訳するとオレには信条や道義があり、そのために行動したことに過ぎない。他人と思考や信念は違えど、優れた徳と悟りを得て、その

結論として、彼は自らの潔癖さを貫く道を選んだだけだ。

話を聞いて貰ったうえにこんなオレのつまらぬ考えのために悩むことは無い。理解することは正しいことだが、あまり根を詰めないで欲しい。

という意味である。

大妖精の質問を終えると、次の妖怪が静かに手を上げて質問を説いた。

異形の翼、爪、羽の耳を持つ。頭部装備は帽子で羽根の飾りが付いている。

また靴にも同様の飾りがある左耳にピアスを付けている。

ジャンパースカートの雀のようにシックな茶色だが、曲線のラインにそって蛾をイメージしたような、毒々しさを感じさせる紫のリボンが多数あしらわれている。なお、曲線部分については服の裂け目がある。

ミステイア・ローレライである。

「もし私が施しを与えてくださいと言ったら与えてくれますか？」

「もしお前がバラモンだったら、オレが沐浴してる時に施しを求めるがいい。最も頼み事があれば聞いてやらんでもない」

実はカルナの施しをするにはルールがある。

それはカルナが毎日正午に沐浴し、父である太陽を礼拝する習慣があった。そしてそのときバラモン僧が施しを求めてきたならば、何を乞われても望みの品を贈っていた。（これは、カルナが過去に沐浴後にバラモンから布施を請われた際に何もやるものがなかったことを恥じていたためである）

しかしそれでも、他者の頼みは道理さえ通っていれば大抵は断らず、それは敵対する者であっても例外ではない。

「誰か、他に何か聞きたいことは？」

しかし他に誰も質問をしようと手を挙げる子供はいなかった。

カルナに対する質問が途絶えると、慧音先生が手を叩きながらこう言った。

「それじゃあ今日の授業はこれまでだ。みんな家に帰るように」

「はい」

こうしてマハーバーラタの授業は終わり、数十分後に子供達は各自家に帰宅するのであった。